

縄文中期末～後期初頭の配石遺構 “遺跡”の成立について

——東北地方北上川中流域を中心として——

佐々木 彰

はじめに

配石遺構が最も数多く分布し、最盛期を迎えるのは大湯環状列石をはじめとする東北地方中・北部の縄文中期末から後期初頭であるとされている。^{注1}しかし大湯を代表にするにしても、これだけ大規模で整然とした配石遺構群はその存在が予想されるにもかかわらず、その後確認されていない。^{注2}一方、同じ配石遺構という名で呼び表されている遺構に、後期初頭から晩期にまで確認される石棺墓の系譜がある。^{注3}東北地方では今のところ青森県を中心に分布するのみで、他の地域までは確認されていない。東北地方で最も一般的に確認されるのは円形に河原石を配し、その中央に立石をもつ小規模な配石遺構であり、立石をもたない配石とともに群集をなし各地に発見されている。

このような遺跡で最も著名な遺跡が、岩手県北上市に所在する樺山遺跡である。後に詳述するが、以前この遺跡の配石遺構群は中期後葉に位置づけられ、その分布がランダムなあり方を示すことから大湯環状列石の祖形型といわれてきた。ところが近年では配石遺構群近くの地点から後期初頭の包含層が確認され、また配石遺構出土の石皿と包含層中のそれとが同形態であることから、配石遺構の構築年代も中期末～後期初頭に求められつつある。この観点に従えば、配石遺構が形成された時期をもって、地点を変えながらも前期末から続いた樺山遺跡は廃絶されることになる。

先に、筆者は樺山遺跡と同じ北上川中流域に分布する配石遺構遺跡である宮沢原C・D遺跡を中心に検討している。^{注4}台地縁辺部に立地する遺跡は、同じ台地上にいくつかある広大な遺跡群の最終末にあたり、その構築年代は中期末～後期初頭に求められた。すなわち、そこには配石遺構の時期ばかりではなく、遺跡のもつ構造全体も樺山遺跡と共通する部分が多いのである。そして筆者が調べたところではこのような在り方こそが、北上川中流域で最も一般的な配石遺構遺跡の在り方のよう^{注5}に思われた。

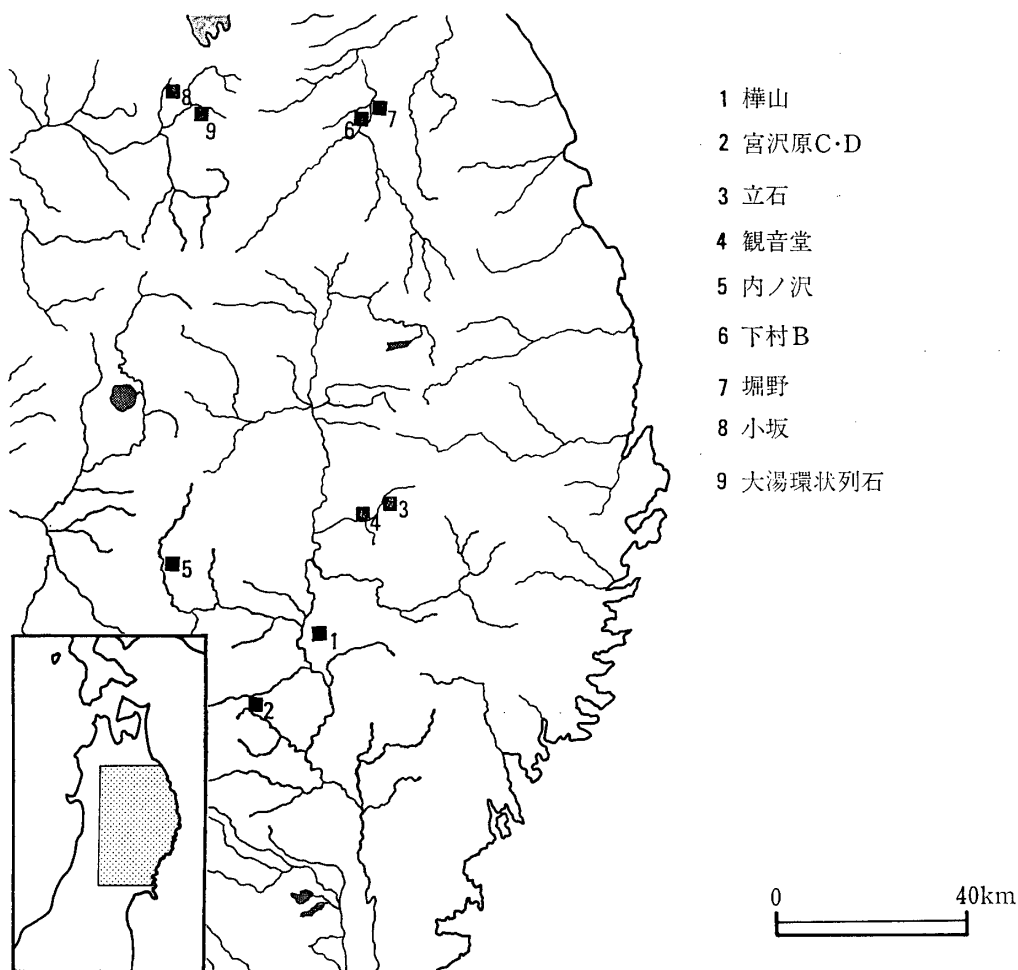
もともと配石遺構という名称は環状土籬・環状列石など、名称の変遷にも示されるように、大湯遺跡発掘以後さまざまな遺構が確認されたことから、より総称的な名称に変化していった経緯がある。^{注6}その上、近年の発掘件数の増加に伴い、配石遺跡は時期・地域を問わず多様な分布を示していることが次第に明らかになりつつある。しかしこれらの遺跡も時期・地域を限定してみた場合には、上述したようにいくつかの段階で共通性も見てとれそうである。

今回提出する論考は従来の遺構中心の研究方法の視点を変え、時期・地域を限定し、配石遺構の分析もさることながら、周辺遺跡の状況や立地を分析の中心に考えることを目的としている。最終的には大湯遺跡をはじめとする、東北地方の錯綜した配石遺構遺跡の地域性および系統性の抽出にあるのだが、手初めに北上川流域に分布する中期末葉から後期初頭にいくつかの配石遺構遺跡から、さまざまにいわれる配石遺構遺跡の成立の過程を検討してみたい。

I 北上川流域の配石遺構“遺跡”

北上川流域では配石遺構は中期末あるいは後期初頭の遺跡に必ず伴うわけではなく、伴う場合でもきわめて限られた範囲から一基もしくは数基が確認されているにすぎない。代表的な樺山遺跡をはじめとして、この地域にはいくつかの配石遺構遺跡が確認されているが(第1図)、このように配石遺構が“群”として確認され、一定の場をもつ遺跡は門前式土器の分布と同様に決して多くはない。^{注7} 題名に配石遺構“遺跡”とわざわざ記したゆえんである。

これは一つには発掘例が少ないことにもよるが、遺跡数そのものが少ないことに起因するのであ



第1図 北上川中流域の配石遺構“遺跡”

ろう。これらの遺跡の過少性については後に述べるが、まして周辺の遺跡まで明らかになった遺跡は全くといってよいほどない。その中でもいくつかの遺跡で集落址との関連が注目されている。ここでは配石遺構が“群”として確認され、しかも周辺の遺跡との関連が比較的明らかな遺跡を中心に検討を試みる。しかしここで述べる遺跡が筆者の観点による北上川中流域の配石遺構“遺跡”のほとんど全てである。

(1) 樺山遺跡

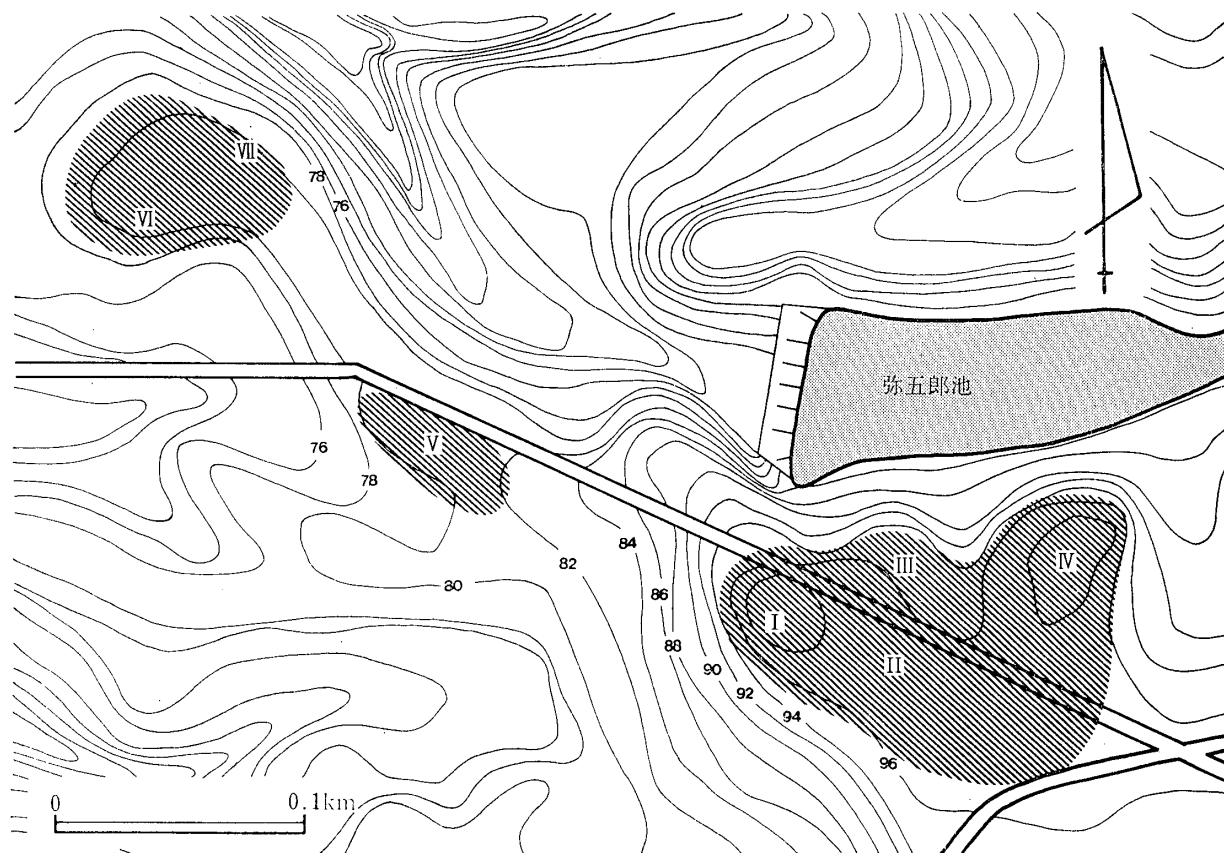
大湯遺跡発掘に前後して、北上川流域でもいくつかの重要な発掘が行われている。ここに紹介する樺山遺跡もその最大の成果の一つである。樺山遺跡は1951年から1977年まで計5回調査され、ほぼ全容の明らかになった遺跡である。^{注8}

調査の結果、樺山遺跡とは立地および時期的に、3つに区分される遺跡であることが明らかとなった(第2図)。第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地点とされた最も高い標高98mの台地上には前期(大木6式)から中期(大木9)にかけての遺物包含層、および集落址が確認されている。台地中央には遺物・遺構は確認されず、包含層・住居址とも台地縁辺部を巡るように形成されていた。この集落址の存在は1951年の発掘当初から認識されており、報告の中ですでに江坂氏は配石遺構群の形成を、この集落址を営んだ集団に求めている。

この集落址から西に見下ろす第Ⅴ地点とされるゆるやかな斜面上に、配石遺構群が造り出されている。配石遺構は1954年の段階でほぼ全容が明らかになったが、その後1977年まで追加発見されている。配石遺構は全部で35基の発見である。ただし後世の破壊をだいぶ受けていたとされ、1968年の段階で構築当時の原型を保っていたのは13基とされる。江坂氏はこれらの遺構の類似性を注目し、いくつかの類別を試みられている(第3図)。

第一に注目された配石遺構は大湯遺跡の日時計型の配石を彷彿とさせる26号址である。河原石を放射状に配し、中央に立石をもつタイプである。放射状に立石を取り囲む形態に注目し、後に大湯・野中堂遺跡の複雑な構成を示す、日時計の配石遺構に発展する点を強調されている。ただし樺山ではこのタイプの配石は一基しか確認されていない。図には第1類型として便宜的に示しており、以下同様に第2、第3として示している。

第二は礫石を乱雑に配し、中心部よりいずれか一方に偏して立石をもつものであり、阿部氏のいうBタイプに属するものである。^{注9}13基中6基がこの型である。なお、4基の配石下部には土壌も伴っていた。配石の長軸・立石の方位などには規則性をもっていない。第三は阿部氏のいうAタイプに属するものであり、比較的大形の礫石を周囲に配し、その中に小形の円礫を敷き詰めた形態のものである。立石などはもっていない。5基の確認であるが、2基にそれぞれ土壌とピットを伴っていた。第四は立石のかわりに石皿を配した形態であり、2基の確認である。図には第11号址を示しているが、石皿は他の偏平な石とともに、中央の配石を取り囲むように一方に偏して直立させられている。12号址も11号址とほぼ同様であるが、石皿一個のみが直立させられていた。どちらも配石下部に土壌を伴っている。



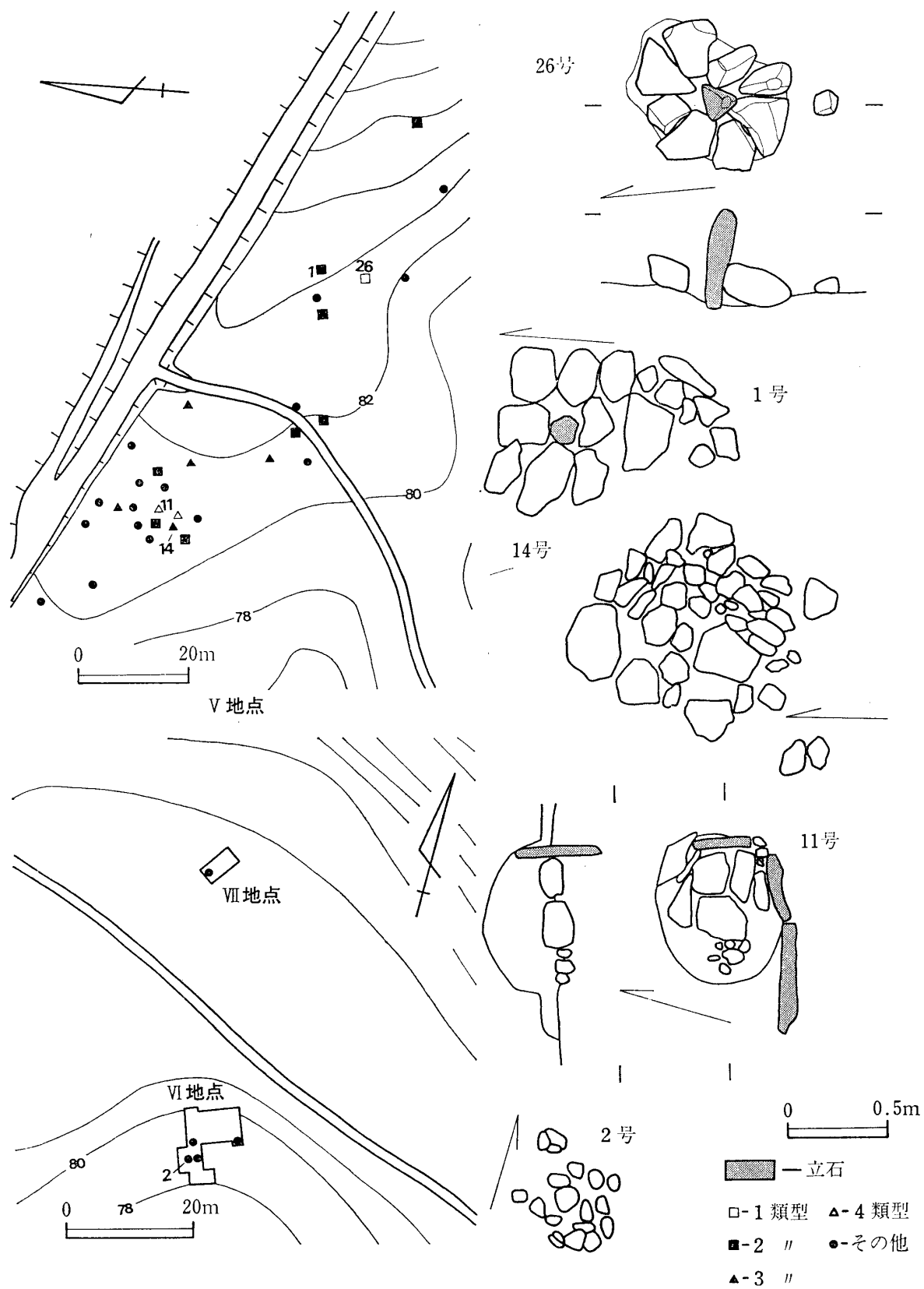
第2図 樺山遺跡〔北上市教委（1969）を一部改変〕

他にもさまざまな遺構が確認されているが、以上の4類型に属すると思われるものがある一方、“どのような形に配石されたものの残骸であるのか、まったく明らかにしえないもの”が多数あったとされている。またこれらの配石には規則性はなく、図にも明らかなように、さまざまな形態の配石遺構がランダムに構築されている。もう一つ重要な点はVI・VII地点に近い西北部に遺構が集中する傾向の見られる点である。筆者の想像にすぎないが、この現象はよりVI・VII地点を中心とする台地縁辺部が意識されたことから、このような結果になったのであろう。

以上述べた第V地点の他に、第VI地点からも4基の配石遺構が発見されている。ただし4基とも配石はきわめて小規模なものであり、立石ももっていなかったらしい。さらに配石下部に土壌も無いことから、調査者は第V地点の配石と“かなりの差がある”点を指摘している。最も明確であるとされる2号配石は“直径約50cmの範囲に環状にしかも組んだ様に並べられ、中央部に偏平な河原石を2個おく”形態であり、おそらく第3の類型に属する遺構であろう。他の3基の配石遺構もこれとほぼ同様の形態と考えられるが、詳細は明らかでない。これらの配石は第1・2号がA3区4層から、第3号がA3区3層下部から、第4号がA4区3層下部から4層上面に接してそれぞれ発見されている。

報告によると3層・4層出土土器には“はっきりとした型式学的差異”が認められたとされ、3層下部出土土器は“両者の中間的様相をもつ”とされている。4層は大木9式の新しい方、3層下

縄文中期末～後期初頭の配石遺構“遺跡”の成立について



第3図 樺山遺跡の配石遺構〔北上市教委(1969) 他を一部改変〕

部からは大木10式でも梨木田第1群に類似するもの、3層上部からはいわゆる門前式がそれぞれ出土したとなっている。以上の記載を配石遺構の確認面と比較すれば、少なくとも門前式を出土した3層から確認された配石遺構はなく、全て4層から3層下部にかけて、すなわち中期末葉を中心とした時期に配石遺構が構築されたことになる。

第Ⅶ地点からも配石遺構が2基確認されている。遺構の形態は判然としないが、どうやら第Ⅵ地点のものとはほぼ同様な形態となるらしい。1基は住居址北側の床面上(?)から確認されたといい、報告には明確な記載はないが、門前期の所産らしい。もう1方もこの配石近くから確認されており、やはり門前期の所産とされている。なお、この配石周辺には“落ち込みが見られ、木炭片・灰・さらに小骨片が含まれて”いた。

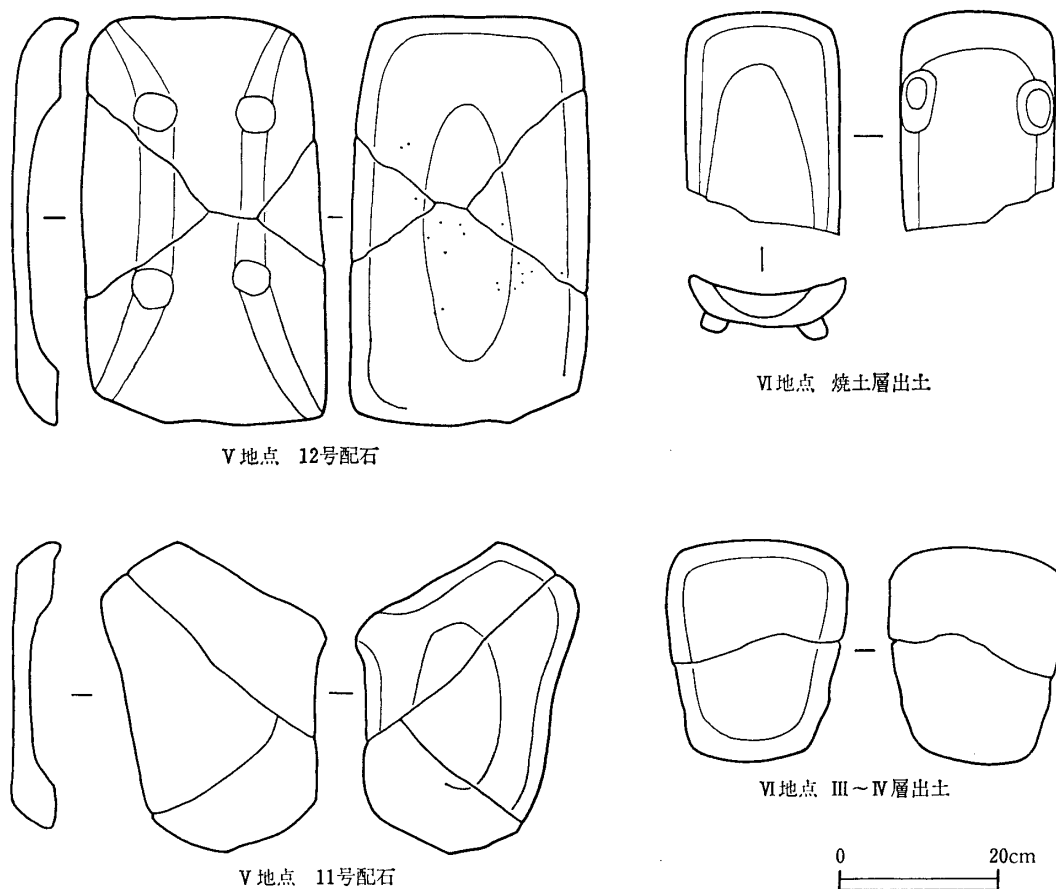
第Ⅵ・Ⅶ地点の配石遺構は第Ⅴ地点で確認された立石をもつ形態のものとは異なってやや粗雑であり、また実測図で判断するかぎり、単なる集石遺構(?)としかとらえられないものも含まれる可能性がある。ただし後述するようにこの地点に配石遺構群が形成された点は重要な意味をもつように思われる。なぜなら、樺山遺跡全体の終了時とほぼ同時期に台地縁辺部を中心とした地点に、これらの配石遺構群が造り出されたことになるからである。

以上のように樺山遺跡の配石遺構は最も標高の高い第Ⅰ～Ⅳ地点を除き、それより一段低い小丘陵状に発達した同じ台地上の第Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ地点から確認されている。第Ⅵ・Ⅶ地点の配石遺構は中期末～後期初頭に形成されたことは明らかであるが、第Ⅴ地点の時期が問題となる。“はじめに”でも触れたように江坂氏は当初から第Ⅰ～Ⅳ地点の集落址との関連を強く考えられ、Ⅴ地点の配石遺構群の形成を中期に求められている。また、第13号址下部の堅穴内から大木9式の、第23・24号址から大木8式の土器片が出土したこともこの点を傍証する。ただしこれらの土器片と中期後葉以降(?)に位置づけられる第11号址・第12号址の石皿以外、配石地帯から見べき出土遺物はなかったとされる。

ところが1968年の発掘によって、第Ⅵ・Ⅶ地点から配石遺構が確認され、さらに第Ⅵ地点から発見された石皿が11・12号址出土のそれと同形態であることから、第Ⅴ地点の配石遺構群の年代もこの時期に求められてくるようになった(第4図)。この年代観を受けたかは明らかではないのだが、77年の調査報告ではⅤ地点の配石遺構群に対して、“出土遺物から判断するなら、縄文中期末から後期初頭のある時期”に構築年代が求められるとする記載が見られる。肝心の出土遺物およびその出土状況が示されておらず、筆者には見当もつかないが、新たに発見された第34・35号址とされる配石遺構が大木8a式の住居址上から確認されたことから、この時期以降であることはほぼ明らかになったようである。中村氏はさらにこの観点を押し進め、Ⅵ・Ⅶ地点を大木10～門前式の集落址に、Ⅴ地点をこの集落址を営んだ集団が造り出した配石遺構群として示されている^{注10}。

このように第Ⅴ地点の配石遺構群の構築年代については江坂氏と68年以降の見解とが対立している。これは配石遺構群の出土遺物の少なさによるものであり、長年にわたって攪乱を受けたことも判断を一層困難なものにしている。江坂氏の見解に従えばⅤ地点の配石遺構群とⅥ・Ⅶ地点のそれ

縄文中期末～後期初頭の配石遺構“遺跡”の成立について



第4図 樺山遺跡出土石皿〔『北上市史』他より転載〕

とが別々の時期に形成されたことになり、一方後者に従えば両地点とも中期末～後期初頭の短期間に構築されたことになる。しかし石皿の類似性からV地点の配石遺構群のいくつかは中期末～後期初頭に造られた可能性もあるものの、現段階では第13号址下部の竪穴内からの大木9式の土器片の出土を重視し、やはりこの頃から配石遺構群が形成されたと見るべきではあるまいか。配石下の住居址の存在もこの点と矛盾しない。すなわち、V地点が中期後葉（大木9？）、VI・VII地点が中期末～後期初頭（大木10～門前）を中心とした時期の配石遺構群の成立である。そこにはV地点からVI・VII地点へと向かう遺構群の時期的な変遷の状況も示せそうである。

北上川流域で最も様相の明らかである樺山遺跡ですら、このような問題を抱えているのであり、配石遺構形成の時期も明確ではないのだが、大まかに次の点を示せそうである。一つは台地上のI～IV地点からV地点を経て、VI・VII地点へと向かう遺跡の占地上の変化の様相であり、もう一つは樺山遺跡の最も重要な画期が大木9式を中心とした時期としてとらえられそうな点である。中期後葉のこの時期はI～IV地点の集落址の終末期とされ、V地点の配石遺構の構築の時期（？）でもあり、さらにまたVI・VII地点の包含層形成の時期でもあった。もっともV地点ではそれ以前の段階の

住居址および遺物も確認されていることから、配石遺構群の形成はともかく、V地点への進出はより以前の段階に始まっていたと思われる。ともあれ中期後葉に樺山遺跡で、台地先端部を目ざした遺跡の占地上の変化をとらえることができる。しかも大木9式以降中期末葉からは、遺物はVI・VII地点のみの確認となり門前期まで継続される。

ただし報告に掲載されてある出土土器から判断する限り、大木9式から10式への変遷には土器細別上埋めなければならない空白も指摘できそうである。出土地点であるVI・VII地点とも台地縁辺部に限った小発掘であり、はたして報告通りの空白を示したものは不明とせねばならず、また台地中央部にどのような遺構が形成されていたのかという点も明らかでない。すでに水田になっており不明であるが、おそらく状況から判断して、中期末～後期初頭の配石遺構を中心とした遺構がある程度の広がりをもって形成されていたと推定される。

このようにさまざまな問題をかかえているものの、樺山遺跡とは大きく3つに区分される遺跡群で構成されている遺跡であり、丘陵上に発達した同じ台地上の高所から低い地点への遺跡の占地上の変化が示される。さらに低い地点への変遷の途上で配石遺構群が形成されるのであり、後期初頭すなわちこの樺山遺跡全体の形成を終える時点で台地端部に進出し、しかも継続して配石遺構群が造りだされる点は重要である。

(2) 宮沢原C・D遺跡

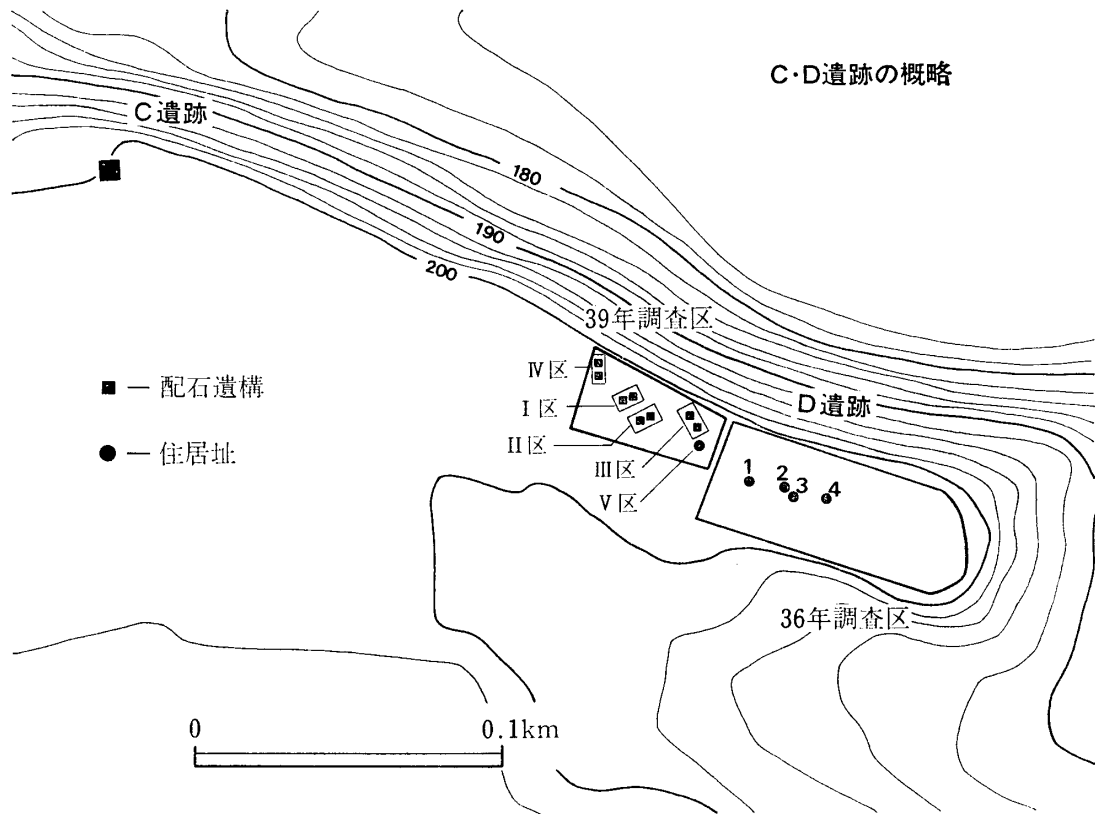
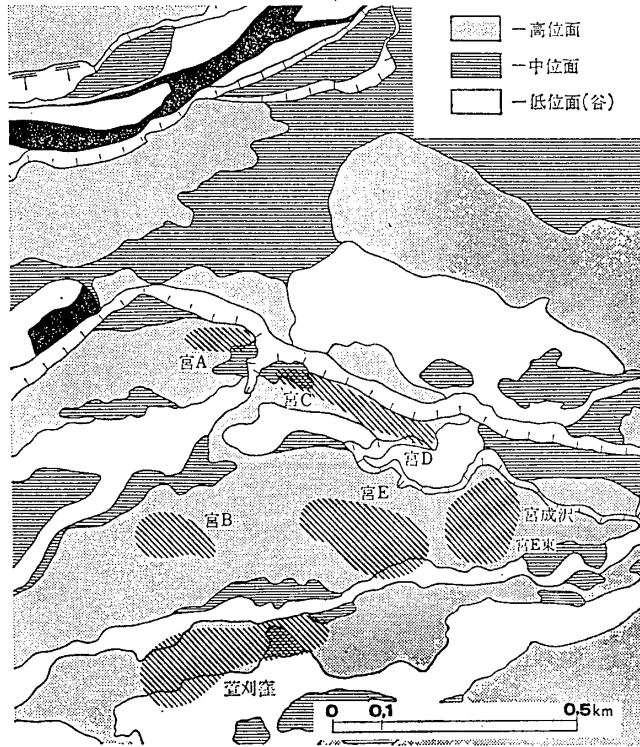
樺山遺跡と最も近く、時期的にも同じ頃つくられた配石遺構“遺跡”が宮沢原C・D遺跡である。すでにこの遺跡の景観については『古代』誌上に発表した^{注11}が、ここでは配石の形態と立地、および周辺の遺跡の変遷に焦点を絞り再論する(第5図)。『胆沢町史』などでは宮沢原CおよびDは別個の遺跡として扱われているが、両遺跡とも中期末～後期初頭の遺跡であること、同じ台地上に立地すること、CもDも配石遺構を特徴とすることなどから同一遺跡であることは明らかである。発掘地点をそのまま遺跡名としたことから、このような命名になったと思われる。

宮沢原C遺跡^{注12}の報告では写真で配石遺構一基のみが紹介されている。ただし、すでに破壊をうけていたが、周辺には配石遺構がこれ以外にもいくつか存在したらしく、従ってC遺跡にも配石遺構群の形成がみられたものと思われる。写真に報告されている配石遺構は礫石が円形に配され、中央もしくは一方に偏って立石が直立していたと思われる。樺山で最も一般的に見られた第2の類型とほぼ同様の配石遺構であると考えられる。この“石組と混在していた土器片は大木10式”とされ、ほぼこの時期の配石遺構であろう。なお、配石下の土壌の有無は確認されていない。他にこの地点からは門前式およびそれに後続する資料を豊富に出土した土壌も確認されている。ただし周辺の表採資料を検討しても他の時期の遺物は確認されず、宮沢原C遺跡とは中期末～後期初頭の短期間に形成された遺跡である。

C遺跡と同じ台地上の反対側の東側に位置するのがD遺跡^{注13}である。D遺跡は36年および39年の過去二度にわたって調査が行われている。36年の調査では配石らしい遺構も確認されているが、確実には住居址4軒のみの確認である。前期末～中期末に位置づけられるもの1軒、時期不明1軒、そ

縄文中期末～後期初頭の配石遺構“遺跡”の成立について

遺跡の分布状況



第5図 宮沢原遺跡群 [佐々木 (1987) より]

して配石遺構地帯に近い2軒が大木10式期とされる。36年の調査でも予想されていたが、つづく39年の調査でようやくいくつかの配石遺構が確認され始めた。配石遺構は全部で8基の確認とされる。ただし墓地建設のためのブルドーザーによる整地作業が完了した後であったので、比較的残りのよい遺構のみを調査の対象としたらしい。報告には“整地した現地表面一帯に大小さまざまな河原石が散在していた”とされ、次に述べる遺構以外にも配石遺構が存在していた可能性が強い。

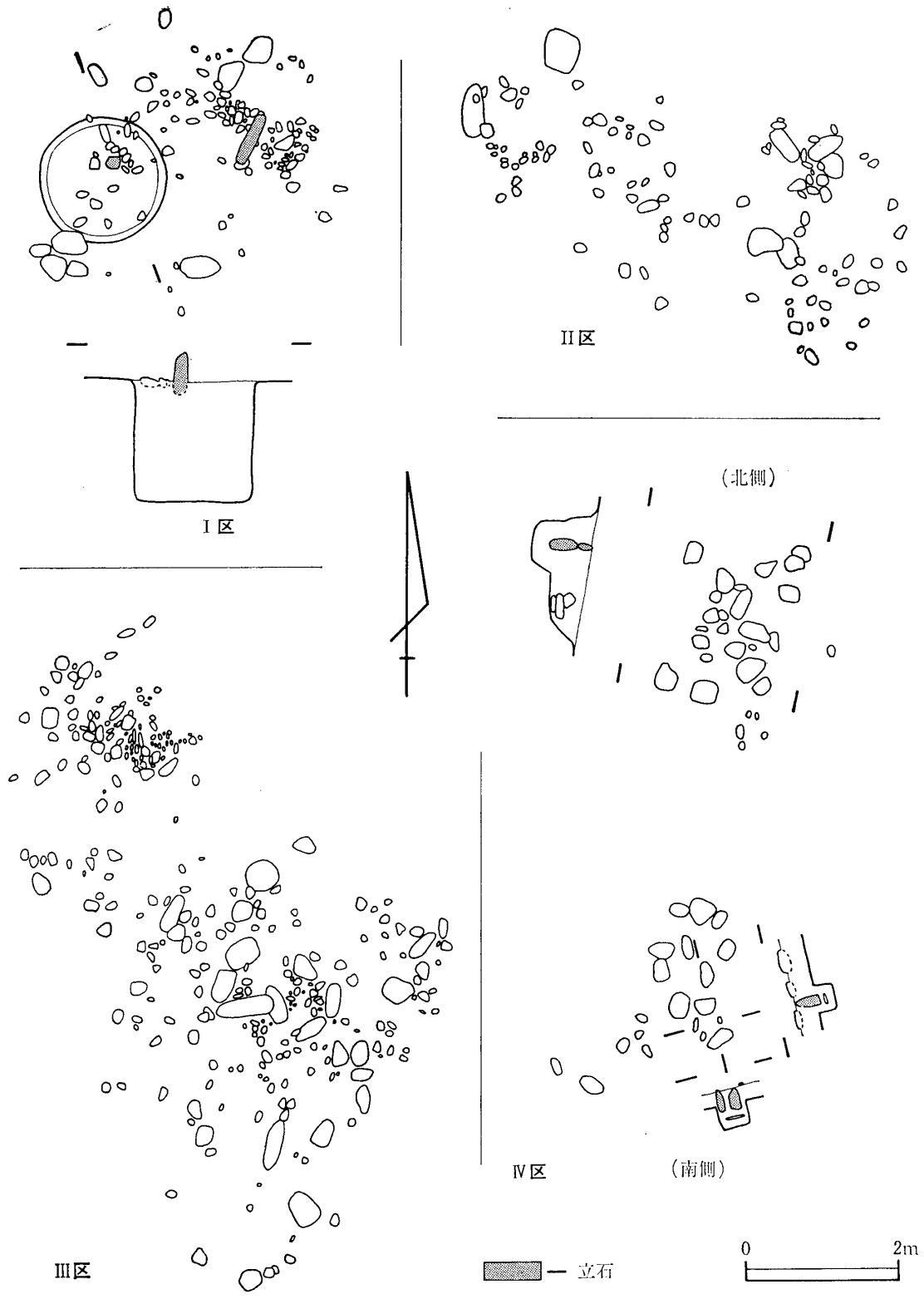
報告では配石遺構はⅠ～Ⅳ区にわたって点在している(第6図)。Ⅰ区ではC遺跡と同じ形態の配石遺構が確認されている。そのうちの1基は調査の時点でも立石が直立していたとされる。配石下には直径1.6m、深さ1.6mの土壌も確認され、土壌内からは半完形の土器2点と骨片が出土している。土器は壺型(?)と深鉢型であり、壺は類例を知らず明らかでないものの、深鉢は大木10式でも新しい部分に位置づけられる。立石周辺の河原石は実測図では散乱しているが、過去には円形に配されていたと考えられる。土壌を中心に考えると立石はやや北寄りに偏している。もう一方の配石も長さ60cmの長楕円形の河原石が確認されていることから、おそらく同様の立石をもつ配石遺構と思われる。ただし配石下の土壌の有無は確認されていない。

Ⅱ区の配石遺構も実測図から判断しておそらく2基存在していたと考えられたが、雑然としていて明確ではなかったとされている。配石下は未調査であり、配石の形態も明らかでない。

Ⅲ区の配石遺構も2基もしくはそれ以上の確認であり、あまり明確ではないもののD遺跡で最も良好な遺構である。Ⅲ区南側の配石遺構は実測図では直径4.3mをはかる大形の配石遺構である。ただし配石の河原石は散乱しており、実際にこの規模かどうかは不明である。さらに立石に用いられたかもしれない長楕円形の河原石もいくつか確認されており、配石遺構が2基以上存在した可能性もある。従ってこの北側の配石遺構の規模・形態等は不明とするほかないが、立石が存在したとすれば、Ⅰ区の配石と類似した遺構が考えられる。北側の配石遺構は礫石も小さいものが多く、規模も南側に比べ小形である。長軸で約2.5mを計る。実測図では立石に用いられたような長い礫石はなく、また礫石の大きさを考慮にいれなければ、樺山の第3類型もしくは阿部氏がA類とした配石に類似する。ただし、立石が抜き取られていた可能性もあり、断定はできない。この遺構で最も注目すべき点は“組石の端には一個の土器が置かれた状態で発見された”ことであり、この種の遺構を考える上で多分に示唆的である。報告の記載からみて中期末～後期初頭と思われるが、この土器は報告されておらず、筆者が出土遺物を実見したおりも特定することはできなかった。なお、南北の遺構とも配石下部の調査は行われていない。

最も西寄りのⅣ区の様相はやや複雑である。おそらく2基の配石遺構からなり、2基とも配石下の土壌まで調査されている。報告によると北側の配石下の土壌は鍵形で、鍵形の一方はさらに土壌が掘りこまれており、わずかに上面を出して立石が中央に配されていた。遺構確認面が掘り込み面とすると、立石のほとんどの部分は土壌に埋設されていたことになる。さらにこの立石と土壌を覆うように上面にも礫石が配されていた。配石の規模は直径2.7mの円形である。土壌の深さは確認面から最深部で0.9mをはかる。南側の配石もほぼ同じ形態の遺構である。上面を覆う配石を剥ぐ

縄文中期末～後期初頭の配石遺構“遺跡”の成立について



第6図 宮沢原D遺跡の配石遺構〔草間(1967)を一部改変〕

とやはり2個(?)の立石が現れ、その下面には平板な割り石と土壌が現れたとされている。平板な割り石は土壌に蓋をするように置かれていた。なお、上面の配石を除去する際には焼土も確認されたという。上面の配石は長軸2.2mの楕円形であり、土壌底面までの深さは0.5mである。

報告の記載が事実とすると、両遺構とも配石下に立石をもつことになり、樺山遺跡では見られなかった種類の配石遺構となる。しかし、上面の配石は“相当移動して余り期待が出来ない”との記載もあり、整地の際に河原石を集めた可能性もある。また動かされていなかった場合でも、2基の時期の異なる配石遺構が重複していたことも考えられる。このような形態の配石遺構は筆者はいまだ知らず、^{注14}類例の増加を待って再度検討したい。

V区とした地点からは炉址が確認されている。石囲炉であり柱穴も確認されていることから、住居址であることは疑いないが、時期不明であるとされている。ただし、36年の調査でこの近くから大木10式期の住居址の2軒確認されており、1軒は埋甕炉、そしてV区に最も近い一号址は石囲炉をもっていた。おそらくV区の住居址もこの頃のものであろう。

以上述べたようにC・D遺跡とも配石遺構の形態は立石を特徴とし、大きく見れば樺山遺跡の第2類型と類似した遺構を特徴とした遺跡である。ただし個々の配石は樺山で見られたものより大型であり、また大きな礫の他に小さな礫を多数利用している点で違いも認められる。さらに配石下まで調査された配石遺構全てに土壌を伴う点も注目される。特にI区の配石下の土壌から2点の土器が出土したことは“埋納”という観点から考慮すべき現象と思われる。しかし他の遺跡を検討してもこのような例はあまりなく、樺山でも明確には確認されていない。さらにD遺跡とは西側を中期末の住居址群が、C遺跡に近い東側に中期末～後期初頭の配石遺構群が形成されていた遺跡である点も理解されると思われる。D遺跡がC遺跡と一連の遺跡であることはすでに述べたが、C遺跡からは堀ノ内式に併行する遺物も出土しており、D遺跡からC遺跡への時期的な変遷も考えられる。先に述べたように、もし樺山のV地点が中期後葉に位置づけられるとしたならば、V地点からVI・VII地点への立地上の変遷を彷彿とさせる現象である。

以上宮沢原の配石遺構群について述べてきたが、遺構群周辺には遺跡が点在しており、これらの遺跡が相互に関連しあいながら、C・D遺跡成立に結びついていったものと思われる。ここでは遺跡群全体の変遷からC・D遺跡の配石遺構群成立までの背景を考えてみたい(第5図)。

宮沢原遺跡群からは早期から晩期に至るまでの遺物が確認されてはいるものの、一定の分布域をもち時期的にも継続するのは前期、大木4式頃からC遺跡の堀ノ内併行期までである。この遺跡群の変遷過程についてはすでに述べているので詳しくは繰り返さないが、宮沢原遺跡群で最も古い遺物は萱刈窪・宮沢原Eなど^{注15}台地内奥部から確認されている。大木4式に始まり大木5・6を中心とした遺跡である。ただし宮沢原Eはあまり明確でない。その後大木8式期で最も顕著になるが、分布域は拡大する方向へと向かい、Eを中心にA・D・成沢遺跡などから遺物が確認されている。9式期の様相はもう一つ明らかではないものの、大木10式期すなわち遺跡群の最末期には台地縁辺部のみの分布となる。宮沢原A、C・D、E東・成沢遺跡などが相当する。ただし、これらの遺跡の出

縄文中期末～後期初頭の配石遺構“遺跡”の成立について

土土器は土器細別上で細かな違いも認められ、同時に並存していたかどうかは不明である。この点については後に詳述する予定でいるが、E東・成沢から最も古い遺物が確認され、次にAが、最終的にはDからCにかけて新しい遺物が確認されている。C・D遺跡とはこのように遺跡群の最末期に位置する遺跡であり、しかも台地縁辺部に立地する遺跡である。以前の論考ではこの縁辺部進出の傾向をとりだして、さらにこの地域の他の後期初頭のほとんどの遺跡が低地に立地する点を踏まえ、この現象を後期初頭まで台地に立地を示す“例外的な”遺跡であっても後期初頭以降の低地進出の動きに同調せざるをえなかった状況を想定したのである。野口氏の論点を^{注16}借り、配石遺構群を造り出した集団を台地上に執着を示した集団と推定している。

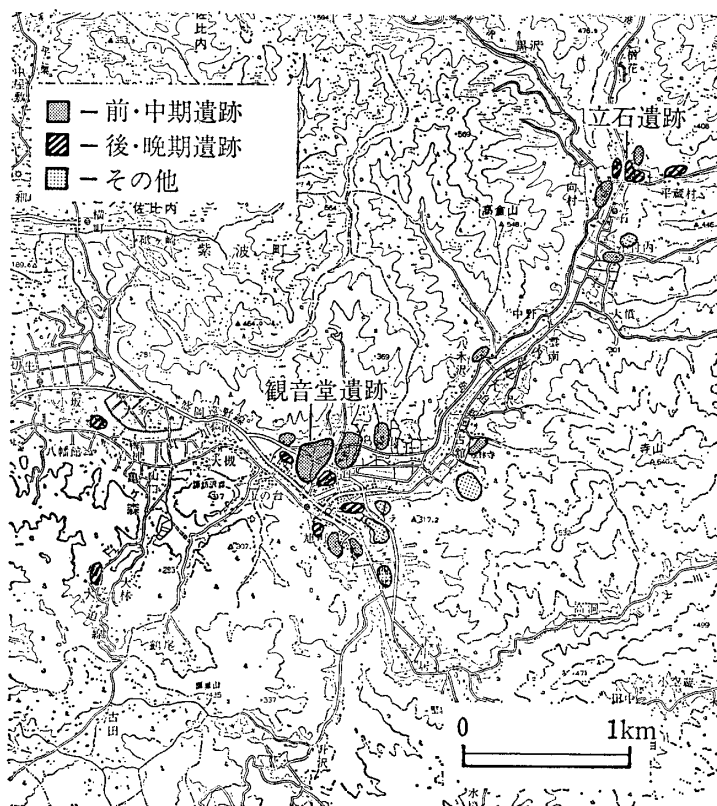
樺山では江坂氏に従えば中期後葉から配石遺構の形成が見られたが、宮沢原C・D遺跡では中期末葉～後期初頭に限って遺構群の形成が認められた。このように時期的には違いが認められるものの、後期初頭に遺跡が途絶し、すなわち配石遺構群もその形成を終え、しかも台地最端部に立地する点は共通する。そして宮沢原では以前の遺跡が台地内奥部から端部へ移行する立地上の変遷が見られたが、樺山でも丘陵状に発達した台地上段からより下方へ移行する立地上の変遷が認められた。このように遺跡群全体の変遷過程には類似する要素も認められる。この点をもう少し、他の遺跡で検討することにする。

(3) 立石・観音堂遺跡

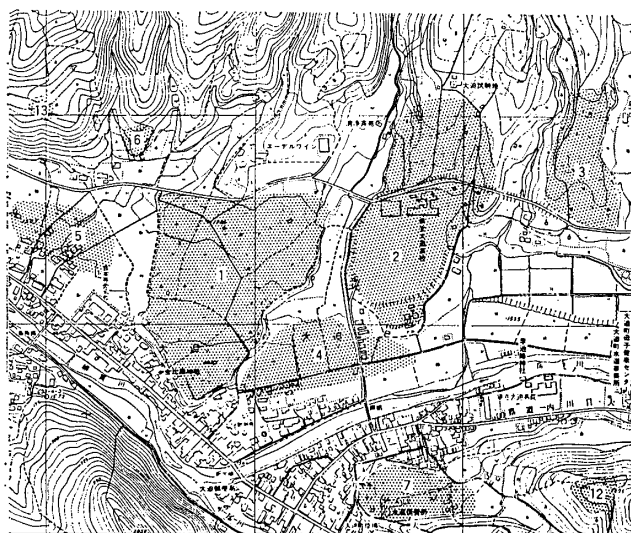
立石および観音堂遺跡は稗貫川流域に分布する遺跡である。両遺跡とも近年発掘調査がなされ、それぞれ後期初頭を中心とした配石遺構群が確認されている。^{注17}ここでは中村氏の記述に従い、すでに樺山・宮沢原で概観してきたように両遺跡周辺の遺跡から検討することにする(第7図)。

図をみて第一に気がつく点は、両遺跡周辺とも遺跡が集中する傾向にあることである。これに関して中村氏は“(遺跡は)稗貫川と他の河川が合流する地域に多く分布”し、小又川に合流する地域に立石遺跡が、中居川に観音堂遺跡が、それぞれ中核的な遺跡として存在し、前期から晩期までの間断なく遺跡の形成がみられる点を指摘している。そしてこれら両遺跡群の間の地域は“水田が多く分布調査が不十分”としながらも、“縄文前・中期に属する遺跡がみられるが、段丘面が狭く、やや傾斜した場所であるため小規模なものが多い”とされ、すなわち両遺跡周辺ほどの遺跡群の形成はなかったらしい。

立石遺跡周辺には高位段丘上にさらば遺跡が、稗貫川対岸の高位段丘上には向村遺跡が立地する。さらば遺跡は表採資料から、大木4～9式期の遺物が、向村遺跡からは大木8～9式期の遺物がそれぞれ確認されている。立石遺跡はさらば遺跡直下であり、さらばに後続する遺物が確認されている。ただし立石からは住居址などは確認されておらず、中村氏是对岸にある後期遺跡の稲荷神社前をさし、“本遺跡がその集落を構成した”可能性がある点を指摘している。立石遺跡は晩期まで及ぶ祭祀遺構(?)が確認されているが、遺物も後期初頭から晩期の大洞C₁～C₂式期に及ぶものが出土している。後期が稲荷神社前に関連するのに対し、晩期に関連して立石東方300mにある平蔵付遺跡を、中村氏は“極めて近い”関係にある遺跡としている。なお、稲荷神社前・平

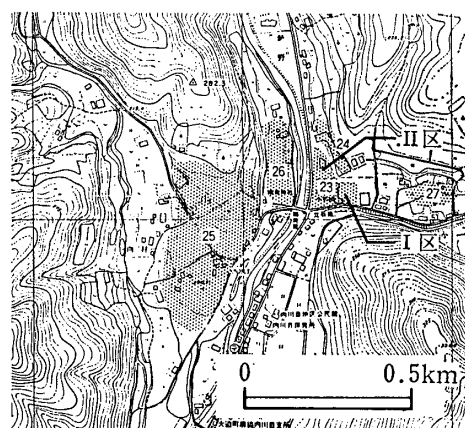


岳川流域の遺跡



- 1 観為堂 2 天神ヶ丘 3 熊の上 4 屋敷
5 ぶどう沢 6 明道沢 7 上の山

観音堂遺跡



- 23 立石 24 さらばば
25 向村 26 稻荷神社前
27 平蔵付

立石遺跡

第7図 立石・観音堂周辺の遺跡分布〔大迫町教委(1987)より〕

縄文中期末～後期初頭の配石遺構“遺跡”の成立について

蔵付遺跡とも低位段丘上の立地である。このように小又川に合流する極めて限られた地域に、大きく見れば前期から晩期に至るまで間断なく遺跡の形成が見られるのであり、さらばと向村遺跡との関係がいま一つ明らかでなく、従って立石との関係も不明なものの、これら一連の遺跡が立石遺跡と時期的にも距離的にも密接な関連を持ちながら機能したことが、漠然とながら理解される。

一方、中居川に合流する地域には観音堂遺跡が立地する。中期後葉から後期初頭にかけて形成された遺跡である。観音堂遺跡が位置する大迫地区は“最も遺跡が集中”する地域とされ、立石周辺と同様に前期から晩期に至るまでの遺跡が確認されている。その中でも観音堂遺跡が最も広く、12万m²にも及ぶ遺跡とされる。観音堂遺跡は上～中位段丘上に立地するが、東側の同じ上～中位段丘上には前～中期の天神カ丘遺跡、熊の上遺跡などが一列に並んで位置している。熊の上遺跡は“大木1式に近い土壌群”の他に中期の遺物が、天神カ丘遺跡からは大木6～8b式および低位段丘に近い台地先端部からは、後期後葉から晩期中葉にかけての遺物が確認されている。この遺跡は過去発掘が行われ、大木6～8b式までの“160基を超えるピット群や住居址が確認された”とい^{注18}う。

立石周辺と同様に低位段丘上には後・晩期の遺跡が立地する。観音堂遺跡と同じ右岸段丘上には屋敷遺跡・ぶどう沢遺跡が確認されている。ぶどう沢はあまり明確ではないものの、屋敷遺跡からは大洞B-CからC₂式を中心に、“後期末葉のコブ付土器から晩期の大洞A式”の土器が確認され^{注19}ている。両遺跡とも観音堂から見下ろす位置にあり、また時期的にもほぼ継続を示すことから、観音堂との強い関連性がうかがわれる。これ以外にも稗貫川左岸の中位段丘上から中期遺跡が、低位段丘上から後・晩期の遺跡が3カ所ほど確認されている。このように観音堂遺跡周辺には遺跡が多いため、逆に遺跡間の関係がわかりにくくいま一つ不明であるものの、立石遺跡と同様に遺跡周辺に前期から晩期に及ぶ遺跡が立地を変えながらも継続して確認される点は注目される。

以上両遺跡周辺を大まかに概観してきたが、次の点が明らかになると思われる。一つは遺跡周辺に前・中期の遺跡が立地しており、その遺跡が配石遺構遺跡とさまざまなレベルで密接に関連すると思われる点である。特に立石遺跡の後ろの一段高い台地上にはさらば遺跡がひかえており、この遺跡が位置的にも時期的にも立石と強い関連があることは容易に推察される。そしてこの関連はすでに述べている樺山・宮沢原遺跡の前・中期遺跡と類似した関係でとらえられそうである。また立石ほど明確ではないが、観音堂遺跡でも谷を挟んだ東側に前期～中期の天神カ丘・熊の上がひかえており、同じ観点で観音堂との関連性もうかがえそうである。もう一つ注目すべき点は両遺跡とも上～中位段丘上に立地する点である。図にも明らかのように中期末～後期初頭を境として、遺跡は上～中位段丘上に形成されず、変わって低位段丘上に後・晩期遺跡が立地する。すなわち両遺跡とも時期的にも、そして上～中位段丘から低位段丘へと進出する転換期に位置することが理解されられると思われる。この点も先に示した樺山・宮沢原と類似する点である。しかしここでは状況の不明な観音堂を避け、立石遺跡を中心に検討を試みたい。

立石遺跡は前述の通り、稗貫川と小又川が合流する地域に形成された遺跡である（第8図）。こ

の遺跡からは中期から晩期に至るまでの遺跡が確認されており、一見すると先に示した樺山・宮沢原とは異なる内容をもつ遺跡とも思われる。しかし詳細に検討すると、幾つかの類似点も見出だせそうである。立石の細かい地形を観察すると、中期末～後期初頭の配石遺構群はさらば遺跡の南側直下、低位段丘より一段高い段丘上に立地しており、後期末葉～晩期初頭の配石や土壇はそれを取り巻くように配されていることが理解される。前者から後者への遺構群の変遷が考えられる。Ⅰ区からは中期末から後期前葉のいくつかの炉址も確認されており、やはり配石遺構を取り巻くように配されていた。ただしこれらの炉址は住居址などに伴うものではないとされ、配石遺構群との関係は明らかでない。これらの遺構以外、この地点からは住居址などは確認されておらず、この区域の配石遺構群とこれらの遺構を営んだ住居域の関係はいま一つ不明である。

配石遺構で最も特徴的なのは第1・2号配石である。これらの配石は樺山の第2の類型と類似するが、違いも認められる。直径2mの1号配石では立石が二つ確認されており、石皿もしくは台石を転用した石を一方は中央に、長さ1.1mの大形の石を南西に偏った状態にそれぞれ配している。もう一つの大きな違いは、0.4～0.6mの“やや大形の河原石を周囲にめぐらして”いる点である。その中には小形の石が敷きつめられた状態で確認されている。配石下部からは深さ0.4mの土壇も確認されている。

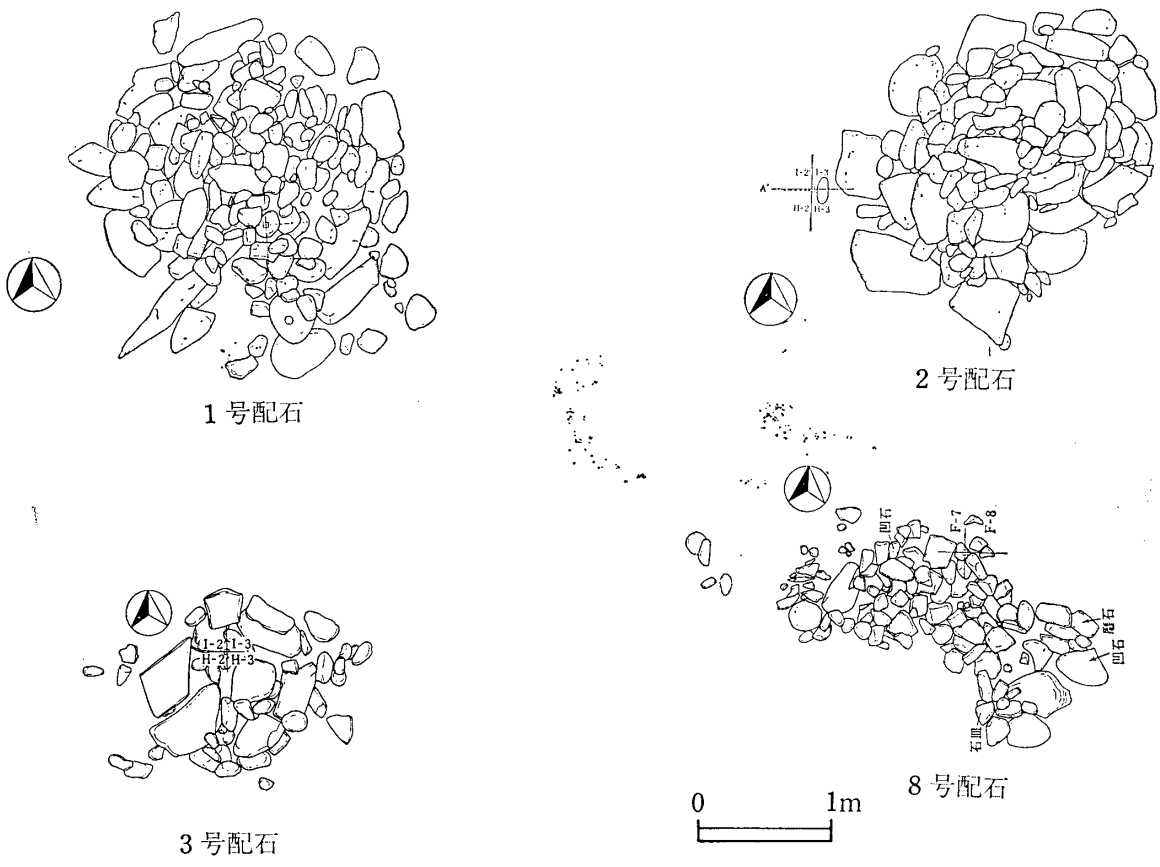
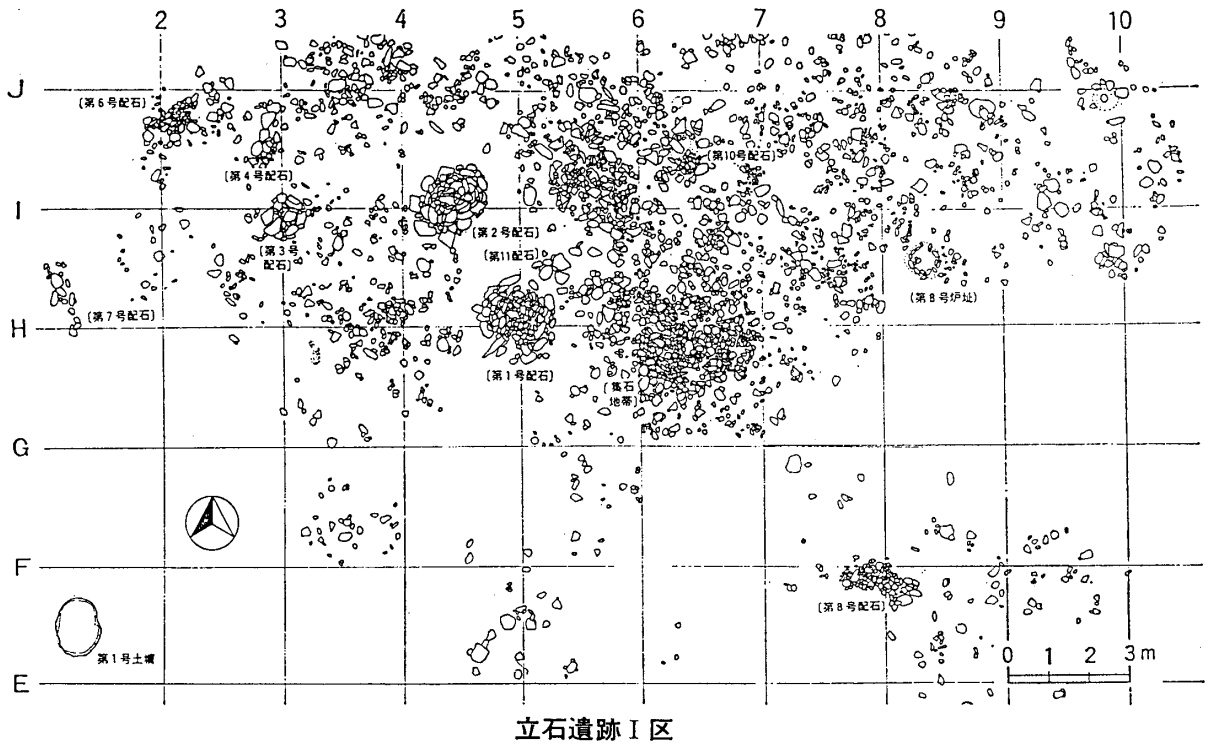
2号配石もほぼ同様の配石遺構である。やはり大形の河原石を周囲にめぐらした形態の配石である。主軸を北東にもち長軸2.2m、短軸1.7mの楕円形である。立石は一つ中央に配されていた。河原石は周囲を画したうえに、中央が盛り上がるように積まれていたとされる。1号配石と同様、配石下には深さ0.4mの土壇を伴っていた。なお、二つの配石とも堀ノ内Ⅱ式併行とされる。

立石遺跡の1・2号配石と同時期の配石遺構はこれ以外にも確認されている。いずれも立石をもたない形態の配石遺構である。3・4・6・7・8・10・11号配石が相当する。4・6・7・8号配石は個々の形態は異なるものの、長軸2～3mの直線的に河原石を配した遺構である。下部に土壇などは伴っていない。3号配石は1m直径の円形の配石遺構である。10・11号配石も3号と配石の形態は異なるが円形の配石遺構と思われる。なお、これらの配石も下部に土壇などは伴っていない。1・2号配石が樺山の二類と比較して多く類似点を持つのに対し、3号以下は立石をもたない樺山の3類の範疇に入ると思われる。ただし3号のみが比較的平板な河原石を用いるなど類似点が多いのに対し、ほかはあまり似ていない。いずれにせよこのタイプの平面的な遺構はバラエティーが有り過ぎ比較に困難がある。

明確な配石遺構はほぼこれらの遺構に尽きるが、それ以外にも“大小の河原石が数百個も雑然として”組み合った“集石地帯”が確認されている。中村氏はこの集石をいくつかの配石遺構が破壊され、このような様相になったことを示唆している。今まで述べた明確な配石以外に、多くの配石遺構がこの区域に存在したことを想像させる。

後期前葉の配石遺構以外にも土壇内に河原石を埋め込んだ後期末葉～晩期(?)の配石遺構も確認されている。ただし後期前葉の配石地帯とはやや離れた位置からの確認であり、さらにこの時期

縄文中期末～後期初頭の配石遺構“遺跡”の成立について



第8図 立石遺跡の配石遺構〔大迫町教委（1979）より〕

の遺構はこのような河原石を用いたものは少なく、土壌が主に確認されている。中村氏はこの点を指し、“配石遺構がその形状を非常に重視されたのは縄文時代後期初頭～前葉の頃で、それ以降配石は簡単な形を止どめるだけのもの”となった点を指摘している。すなわち、立石遺跡では配石遺構群が意欲的に形成されたのは後期初頭～前葉の頃となる。

さらばの遺跡の西側すなわちⅡ区も遺跡の範囲であるが、78年に続く86年の調査で中期末～後期初頭の遺物とともに、後期中葉から晩期中葉にかけての配石遺構群および土壌群が確認されている。今のところ概報のみの報告であるので判然としないが、“敷石状配石遺構”の他に日時計型および立石に石皿を配した配石遺構が確認されている。^{注20} 後者の二つは樺山遺跡でも見られた形態のもらしい。以前の報告ではさらば側に後期前葉の遺構群が、さらにその周辺には後・晩期の遺構の分布が指摘され、Ⅰ区と似た状況も推定されていた。ただしこの年度の調査によって、両時期の遺構群が入り組んでいる状況も考えられるようになり、なお検討が必要である。

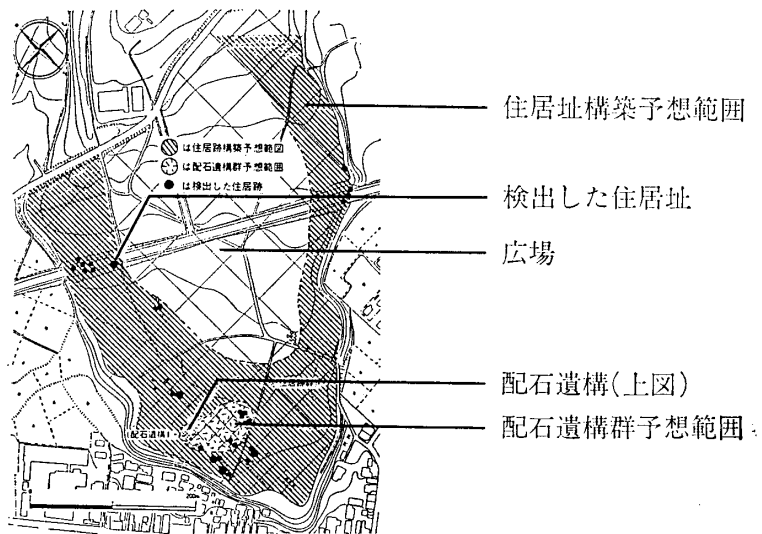
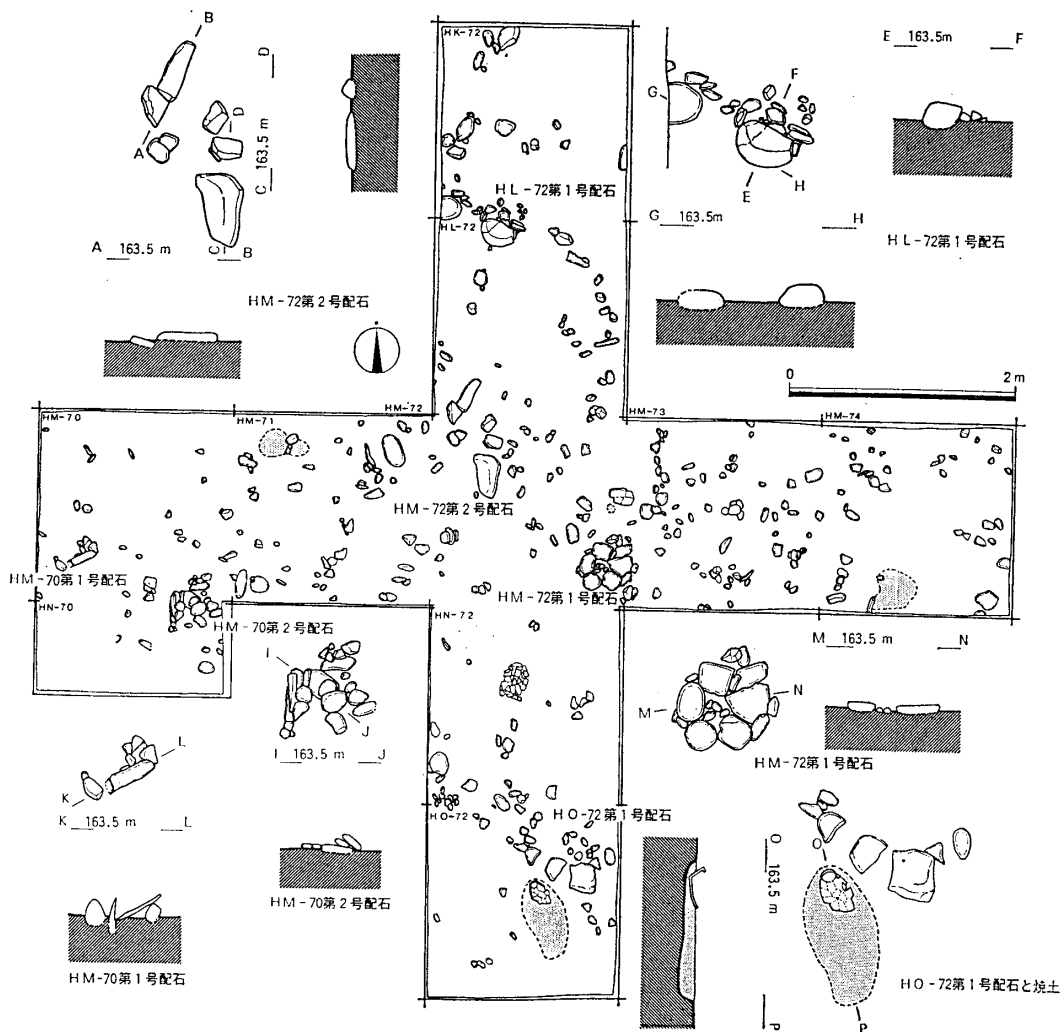
立石遺跡は後期初頭から晩期の遺跡であるが、このようにⅡ区の状況は不明であるものの、少なくともⅠ区では中期末葉から遺跡が形成され始め、後期初頭、堀ノ内併行期を中心とした時期に配石遺構群が形成される点は指摘できる。その後それを取り巻くように、すなわちより下方の段丘をめざして後・晩期のさまざまな配石が形成されていったものと思われる。樺山・宮沢原と後期後葉～晩期の遺跡形成がみられる点など違いもあるが、ほぼ後期初頭を中心とした時期に配石遺構の形成がみられ、台地端部に立地し、しかも前・中期の遺跡が後ろに控えている点などに類似点が認められる。

観音堂遺跡は立石ほど明確ではないが、やはりこのような観点から理解されると思われる。観音堂遺跡は1980から84年まで調査されたが、^{注21} 地点発掘に止まっており、あまり様相は明確ではない。ただし時期的には中期末～後期初頭にほぼ限定され、住居址・土壌・配石遺構などから構成される遺跡であることが明らかとなった（第9図）。

住居址は大木9～後期初頭にかけて形成されたものであり、台地基部西側からは大木9式期の、東側からは10式期の住居址が確認されている。そして台地先端部からは、大木9から後期初頭までの住居址が確認されている。台地全域を調査しているわけではなく詳細は不明であるものの、配石遺構群もこの地域から確認であり、先端部付近に後期初頭の遺物、および配石遺構群が形成されている点は重要である。

配石遺構群も全域を調査しているわけではなく、6基の配石遺構が調査されているにすぎない。立石をもつ配石（HM—70第1号配石）も確認されているが、整然と組まれたものではなく、樺山・立石で見られたものと大きな隔りがある。その他の配石は立石をもたず、いわゆる樺山の3類に似た配石遺構である。しかし立石遺跡でも述べたようにこの種類の配石遺構は判断が難しく、直径0.8mの円形のHM—72第1号配石だけが、わずかに形態も整い類似性を示しているにすぎない。この遺構は形態・規模ともに立石遺跡の3号配石に類似し、土壌も伴っていない点も同様である。中村氏はほかにもHL—72第1号配石、HO—70第1号配石も、立石遺跡の配石遺構と類似性をも

縄文中期末～後期初頭の配石遺構“遺跡”の成立について



第9図 観音堂遺跡の配石遺構〔大迫町教委(1986)より〕

つと指摘している。なお、配石遺構群の下からは住居址が確認されている。3軒の確認であるが、その中の一軒は“大木10式Ⅲ段階”に位置づけられることから、配石遺構群形成の時期は観音堂出土土器Ⅳ群の時期、すなわち後期初頭と報告されている。

配石遺構群は無論この範囲ばかりではなく、図にも示しているようにより広い範囲に及んでいるようであり、すなわち群形成が見られたことはまちがいない。配石遺構が時期および形態的にも、報告されている以外のものが存在していた可能性もある。しかし遺構は台地縁辺部周辺に集中しており、後期初頭の遺物の分布域と重なっている。さらにこの配石遺構周辺からは、後期初頭の住居址および炉址も検出されている。従って明確ではないのだが、後期初頭を中心とした時期にこれらの配石遺構群が形成されたことは十分推定できる。また立地からみて住居址と配石遺構群の形成と何等かのかかわりあいがあると思われるが、いま一つ様相は明らかではない。

観音堂遺跡は未発掘区が多く、このように状況が曖昧であるが、配石地帯が台地縁辺部に近い地点に形成され、しかもこの配石遺構群の形成の時期、すなわち後期初頭をもって遺跡全体の形成を終える点は指摘できるように思われる。立石遺跡と同様にそこには先に述べた樺山・宮沢原と類似点も認められそうである。

(4) 内ノ沢環状列石

以上述べた遺跡と同様に立石をもつ配石遺構を特徴とした遺跡に過去、駒井和愛氏によって発掘が行われた岩手県沢内村の内ノ沢環状列石がある。この遺跡は樺山に近く、北上川支流の和賀川の流域にある。発掘された遺構は保存が行き届いており、現在でもこれらの配石遺構を見学することができる。遺跡は和賀川支流の内ノ沢川に面している。報告によると立石は全部で5基の確認とされ、“忍路の地鎮山の如く”環状に配されていたと推定されている。事実、環状の“中央”も調査の対象になり、墓壇の存在も予想したが、“墓壇と認め得るようなものは存在していなかった”。

報告の記載では個々の配石が立石をもち、それが環状に巡るいわゆる環状列石を想定していたが、現在残存している配石遺構を見ると、発掘区北側にもう一基の配石が存在している。ただしこの北側の配石遺構は駒井氏の描いた実測図にはなく、後に立てられた可能性も否定できないのだが、これを考慮にいれると必ずしも環状にはならず、すなわちまとまりをもたない配石遺構群となりそうである。さらにこの配石遺構を除いたとしても、配石群は環状とはならず楕円形に近い形状となり、非常に特異な“環状列石”となりそうである。発掘区近くにはまだいくつかの配石遺構が埋もれている可能性もあり、筆者は個々の配石遺構がランダムに構築された樺山遺跡と近い配石遺構群の存在を推定している。

このように配石遺構群の分布状況はあまり明らかではないものの、個々の配石は非常に特徴的である。報告されている5基の配石のうち少なくとも2基の配石遺構は一方に偏って立石をもち、樺山の2類と非常によく似た形態の配石遺構となる。報告の記載と現存している他の配石との間には相違点も認められるが、現存する配石で判断する限り、その他の配石も樺山と類似した配石となりそうである。このように個々の配石は樺山と類似するが、残念ながら時期は報告されていない。前

縄文中期末～後期初頭の配石遺構“遺跡”の成立について

期(?)の土器片が配石の周囲からいくつか確認されていたようであるが、報告者もこの時期の配石とは思っていないようである。阿部氏も指摘しているように、^{注23}このような立石をもつ配石は一般に中期末～後期初頭の出現とされ、おそらく内ノ沢の配石遺構群もこの頃の成立であるように思われる。ただし樺山と大きく異なる点は、周辺の状況から判断して幾つかの配石が今後発見される可能性もあるものの、樺山ほど群形成が発達しなかったと思われる点である。

配石遺構が内ノ沢川に面した斜面の末端から確認されている点はすでに述べたが、この斜面の頂部から配石遺構の立地する末端にかけて、かつて広大な遺構が広がっていたとされる。^{注24}現在この地域は斜面が削り取られ水田となっており、範囲など不明となってしまったが、配石遺構より東側に中心をもち、西に張り出すように広がっていたと推定される。保存されていた表採資料を検討すると、遺跡は中期を中心とした時期でとらえられることができる。この遺跡の存在は駒井氏の論文では指摘されていないが、配石遺構群の成立と密接な関連を持つことは十分推定できる。

従ってこれだけの資料から内ノ沢周辺の遺跡の詳細な復元は困難であるが、配石遺構群が内ノ沢川に面した斜面末端から確認され、その周辺にこの配石遺構群と密接な関連をもつ中期遺跡が広がっていた点は指摘できるように思われる。となると漠然とながら、この関係性はすでにみえてきた樺山・宮沢原などと類似した関連でとらえることができるのではあるまいか。すなわち配石遺構群の形成の時期は明確ではないものの、後背地ともいふべきところに配石遺構群形成以前の集落址が広がっている点である。ただし類似点はここまでであり、配石遺構群直下には内ノ沢川が流れ、平野部も広がっていない。今まで述べた遺跡とは周辺の景観が違う点が指摘できそうである。この点は樺山ほどの配石遺構群の発達が見られなかったことと、何かしら関連しそうな点でもある。

Ⅱ 縄文中期末～後期初頭における配石遺構“遺跡”の成立

(1) 立石をもつ配石遺構について

以上、北上川中流域の中期末後期初頭の代表的な配石遺構遺跡について述べてきた。すでに文中でも触れているように、これらの遺跡にはいくつかの類似点が認められることが明らかになったと思われる。第一に観音堂では明らかでなかったが、上述した遺跡では立石を持つ配石遺構が特徴となって確認される点がある。分析を行った中流域では、阿部氏のBタイプとしたこの立石をもつ配石遺構と同じくAタイプとした平面的な形態の配石遺構、およびそれらの変化したと考えられる配石が主となり“群”を構成する。その他の形態の配石遺構があまり見られない点も、この中流域の特色として示せそうである。平面形の配石遺構は過去を遡ってまで立石を伴っていなかったかどうかなど、事実記載ばかりでは判断に苦しむ場合が多いが、立石をもつ配石遺構は最も明らかな配石遺構の一つである。分布は北海道から関東地方にまで及び、^{注25}ここでは江坂氏と阿部氏の論考しか取り上げなかったが、それ以外にもさまざまに論じられ、^{注26}いうならばこの時期を代表する配石遺構である。^{注27}なにも北上川中流域特有の配石遺構ではないのだが、中流域とそれ以外の地域には共存するその他の配石との群構成、あるいは配石自体に違いも認められ、細かく見ればこの地域に限っても

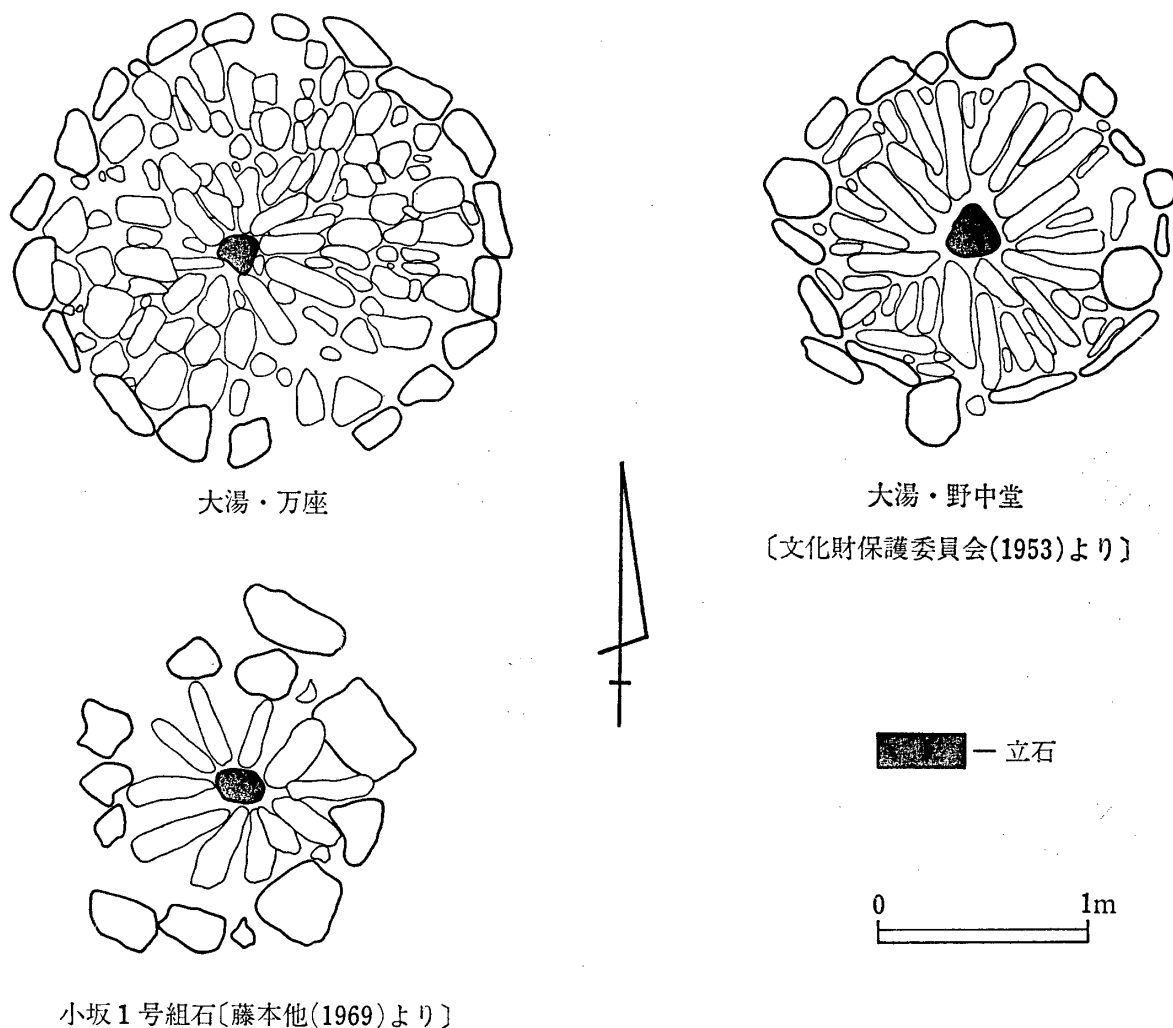
その違いは認められそうである。ここでは最も明らかな立石遺跡と樺山遺跡の立石をもつ配石遺構の比較から、その違いを明確にしてみたい。

立石遺跡からはこの形態の配石遺構が二つ確認されている。第1・2号配石とした配石遺構である。第1号配石は直径約2mの円形、第2号配石は長軸2.2m、短軸1.7mの楕円形であり、二つとも樺山遺跡の長軸約1.3mの1号配石などに比べて大型であり、樺山やその他の配石遺構に比べても同様である。配石を構成する河原石も立石遺跡では中央に比較的小形の石を数多く配し、いくつかの大形の石を周囲に巡らす点に特徴がある。しかし樺山遺跡では特に周囲に河原石を巡らす形態のものは確認されず、河原石の配列も立石ほど意識的に使い分けたものではない。このような違いも認められる反面、立石・樺山では立石を配石の一方に偏して直立させる配石遺構がある。立石遺跡では1号配石が、樺山では1・6・9号配石がこの形態である。筆者が実見した限りでは、内ノ沢遺跡もこれらの配石と同様のものがあり、立石を一方に寄せた配石がいくつか存在している。距離的にも内ノ沢は樺山と近く、また周縁に巡らす河原石もないことから樺山遺跡との強い類縁関係が想定された。立石の位置がもう一つ明確でない宮沢原C遺跡の配石遺構も写真で判断するかぎり、周囲を河原石で画する形態ではなく、この点で樺山のそれと類似しそうである。ただし中央が盛り上がるように河原石を数多く使用し、また規模からいっても立石遺跡と共通する部分も認められそうである。D遺跡の立石をもつタイプの配石遺構も、C遺跡のそれと類似するようにも思えるが、河原石が散乱しており明確ではない。

このように北上川中流域の配石遺構は立石をもつタイプを特徴とする点で類似性が認められる反面、内容から見ればいくつかの違いも認められそうである。類例が非常に少なく、早急な結論は避けねばならないが、いまのところこのタイプの配石を大きく2つに分けて考えたい。一つは樺山遺跡の江坂氏が第1・2類型としたものを代表とし、もう一方は立石遺跡の1・2号配石を代表とする。

樺山と内ノ沢には類似点も認められたが、立石遺跡のタイプが北上川中流域では明確ではない。立石の配石遺構は周囲に大形の河原石を巡らす点に特徴があったが、この形態と類似した配石遺構が秋田県小坂遺跡から確認されている^{注28}(第10図)。“第一号組石”とされた配石遺構である。小坂の配石は立石の回りに河原石を放射状に並べ、さらに周囲を河原石で囲む形態の配石遺構である。立石遺跡の1号配石などと河原石を放射状に並べる点で違いもあるが、実はこれとほぼ同じ形態の配石が大湯遺跡のいわゆる万座・野中堂の“日時計型”の配石遺構である。小坂と大湯はこのように形態も酷似した配石が確認され、また距離的にも近いが、小坂の場合配石が集合し環状とならず、ランダムに分布する点に違いがある。ほぼ同じ頃の成立でこのような配列の違いがあることは、大湯遺跡の環状列石の成立を考える上でも、小坂遺跡の位置はきわめて重要であると思われる。ただし両遺跡とも周辺の集落址の状況は明確でなく、あるいは次に述べる周辺の遺跡群の景観は中流域のそれとは違う可能性もある。

第1図で示したように立石遺跡は樺山・宮沢原遺跡より北にあり、小坂・大湯と近い位置にある。



第10図 大湯および小坂遺跡の配石遺構

従ってこのような類似性が地域的な類縁性によるものにとらえられなくもないが、内ノ沢はともかく樺山のV地点の配石は立石遺跡より早い段階の形成であると思われた。おそらく時期的な差異が関係し、このような形態上の差異となって現れたと思われる。最も特徴的な立石をもつ配石遺構がいまのところ樺山から、立石・小坂・大湯へと変遷する過程が推察される。

ところで大湯遺跡の日時計型の配石遺構に関連し、樺山で江坂氏が26号配石との類似を指摘し日時計型の配石遺構に発展した点を示唆している。筆者の観点との類似も示されそうであるが、一例しかなく江坂氏がいうように、樺山から直接的に発展したものか筆者には分からない。ただし樺山遺跡からは立石が配石の一方に偏している配石ばかりでなく、中央に立てられた形態のものも確認されており、立石をもつ配石遺構もさまざまな形態のものがほぼ時期を同じくして構築された可能性がある。これらの配石の系統的にみた初現の形態は筆者には不明であるが、おそらくこれらの立石を特徴とする配石遺構も早い段階から種々の要素を伴っていたことが考えられる。筆者の想像にしかすぎないが、おそらくこのようなさまざまな配石遺構が相互に影響を与えながら、立石・大

湯などの配石遺構へと発展したものと考えられる。

このような観点で見た場合、立石遺跡と小坂・大湯とでは、立石の周囲を放射状に河原石を並べるかどうかに違いも認められた。大きく見ればほぼ同時期であるこれらの配石遺構の違いは、上で述べた種々の要素を取り込む過程でこのような違いとなって現れてくるのであろう。さらに立石遺跡の1号配石は最も長い立石が一方に偏していたが、この点は樺山・内ノ沢と類似点も指摘できそうであり、この地域の配石遺構を特徴づけるかもしれない。しかし、東北地方には数多くの配石遺構が確認されているにもかかわらず、この立石をもつ配石遺構は以外に類例に乏しく、系統性その他の点に多くの不明な点が多い。この点は分析の範囲をさらに広げ、詳述するつもりでいる。いまのところ、北上川中流域には以上のように大きく2つに区分しうる立石をもつ配石遺構の存在を指摘するに止めたい。

ところで東北地方には中期末～後期初頭に限ってもこのような立石をもたない配石遺構も分布するらしい。“はじめに”でも触れているように青森県には石棺墓を中心とした配石遺構が分布し、北上川上流域にも下村B・堀野^{注29}など配石遺構遺跡がいくつか確認されている。これらの遺跡はどうやら、立石を特徴とする配石遺構群ではないらしい。下村Bの場合、最も特徴的な配石遺構は報告者も指摘しているように、青森に分布する石棺墓によく似た Cf09 配石土壌であり、その他にも配石遺構群を画したとされる直線的な列石、河原石を円形に配した配石遺構なども確認されている。配石遺構ではないが、この遺跡からは甕棺を埋納したと思われる土壌も認められている。概して、中流域と異なり青森県に分布する配石遺構遺跡との強い類似性がうかがえる。ただし、この遺跡の北側には中期後葉を中心をなす集落址である荒谷A遺跡が存在し、さらにこれらの遺跡が馬淵川に面する河岸段丘上に立地する点は、この配石遺構群の成立に対して北上川中流域と同様、何らかの示唆を与えてくれる。

堀野遺跡は下村に近く、馬淵川右岸段丘上に立地する遺跡である。阿部氏によると、この遺跡の配石は全てAタイプとされ、すなわち立石をもたない配石遺構から成り立つ遺跡とされている。しかし周辺の状況も含めこの遺跡はもう一つ明らかではなく、下村Bとの遺跡景観の違いも予想しうる。詳しくは述べないが、これ以外にも北上川上流域では中流域と趣を異にする配石遺構遺跡がいくつか確認されている。^{注31}

立石をもつ配石遺構がさまざまな地域に存在し共通性が認められる反面、群形成に共通性も見られた中流域に対し、北に向かうにつれてほぼ同時期の配石遺構群であっても、その形態にはさまざまな要素が含まれてくる様相が伺われる。おそらく、そこにはこの種の遺跡にも地域差が介在するためと思われる。周知のように東北地方では後期初頭に南半の門前式に対し、北半には未だ解明の十分でない十腰内以前の土器群が成立する。^{注32}これらの土器群はそれ以前の中期後葉～末葉の土器群と比べて、より明瞭な地域差をもつ点が指摘できるように思われる。すなわち、このような後期初頭の土器群の成立とともに、以上述べたようなさまざまな様相をもつ配石遺構遺跡が成立する点はやはり、これら土器群から推察される集団間の動きと切り離しては考えられない現象のように思わ

縄文中期末～後期初頭の配石遺構“遺跡”の成立について

れる。しかもこの時期、各地にさかんに配石遺構が構築されることとも関連しそうな点でもある。しかし、この点も多岐にわたる問題を含んでいるため指摘するに止め、先の立石をもつタイプの配石遺構の問題とともに後に詳述する予定でいる。

(2) 縄文中期末～後期初頭の配石遺構“遺跡”の成立

ところでIで述べた北上川中流域の遺跡には、もう一つの共通性が看取れそうである。すでに繰り返して述べているように、これらの遺跡が立地する周辺に、配石遺構形成以前の集落址と考えられる遺跡が必ず伴う点である。樺山では第I～IV地点が、宮沢原では宮沢原Eおよび萱刈窪から始まりE東・成沢、Aなどを経て、最終段階にC・D遺跡の配石遺構群が成立した。立石でいえばこの遺跡はさらばに相当する。観音堂ではもう一つ明らかではなかったが、この観点からいえば、天神ヶ丘遺跡が相当すると思われる。駒井氏は配石遺構の形成された時期をあまり問題とせず、^{注33}従って現段階では内ノ沢の時期も不明であるが、立石をもつ配石が阿部氏のいうとおり中期末～後期初頭の形成としたならば、この遺跡もほぼこの時期を中心に形成されたものであろう。そしてこの配石の立地する斜面上方には中期遺物を出土した遺跡が控えている。

このようにこれらの遺跡はただ存在したのみでなく、配石遺構成立期まで大きくみれば、連続して遺物が確認される点に意味がある。樺山で江坂氏が指摘したとおり、配石遺構群とこれらの遺跡とが密接に関連していたことが推測される。ただし氏が指摘したのとは異なり、配石遺構群を造り出した集団がこれらの遺跡を営んだ集団と同一であるかという点ではやや疑問も残る。遺跡からの出土遺物は連続性を示すが、配石遺構群の同時期の集落址がもう一つ不明であるからである。樺山・観音堂では配石遺構が形成されたと思われる後期初頭の住居址も確認されていたが、その他の遺跡ではこの時期の集落址は不明としなければならない。ただし樺山では中期後葉の集落址が確認されているものの、VII地点の配石は住居址床面上(?)の確認としか記載がなく、従って調査が地点発掘に終わったこととあいまって、後期初頭の配石遺構を取り巻く集落址はもう一つ不明であった。立石では第1・2号配石とも“堀ノ内II式併行期”に位置づけられているが、この時期の住居址は少なくとも配石遺構群周辺には確認されていない。明確ではないが、宮沢原、特にC遺跡がこのような傾向をもつらしい。すなわち配石遺構群とそれを取り巻く集落址という図式は示せそうになく、詳細に検討を試みてないが、地域を別にしてこれについてはいくつか類例も見出せそうである。また同時期の住居址が確認される場合でも、配石遺構形成以前の集落址の分布域に比べたって小規模であるようである。

この点に対する配石遺構群と集落址の関係は明確には述べられていないが、中村氏の観点が参考になる。中村氏は樺山遺跡でV地点の配石遺構群を中期末～後期初頭に位置づけ、VI・VII地点を配石遺構群を営んだ集団の集落址と想定している。しかし繰り返して述べているように、V地点の配石遺構群は中期後葉に位置づけられると思われ、時期的にみれば中村氏の見解と矛盾する。ただしVI・VII地点では中期後葉の包含層も確認されており、これが集落址に関連した包含層の可能性もあり、従って中期後葉に限って言えば、配石遺構群と集落址の関係は中村氏の見解が妥当なものかも

しれない。すなわちV地点の配石遺構、それより一段低い台地縁辺部上のVI・VII地点の集落址の存在である。中村氏は立石遺跡でもこのような観点を示されており、稻荷神社前遺跡のこのような集落遺跡に想定している。^{注34}

内ノ沢では配石遺構群が内ノ沢川に面しており、このような傾向を示さず、また調査が十分でないこともあまって、全ての配石遺構遺跡でこのような現象を看取することはできないが、必ずしも配石遺構が立地する周辺に、同時期の集落址を伴わない点は指摘できるように思われる。^{注35}さらに想像を許せば、いくつかの遺跡では配石遺構群の立地する地点より一段低い場所に、配石遺構群を営んだ集落址が立地していたことも推定しうるのである。^{注36}この観点からすれば、台地縁辺部に形成される配石遺構群は集落址を見下ろす位置に立地していたことになり、たとえ集落址がなくとも同じ観点から少なくとも低地を望む位置に形成されていたことは指摘できそうである。この点は後にもう一度触れるが、配石遺構形成に関して何らかの示唆を与えてくれる。

ただしこの種の配石遺構群の形成は第1図でも示した通り、北上川中流域では決して多いものではない。もちろん今後調査の進展に伴い、配石遺構が単独もしくは何基かまとまって確認される遺跡も増加すると思われ、実際このような遺跡もいくつか認められている。^{注37}またこれらの配石遺構には形態ばかりではなく、立地の違いも認められる遺跡も存在するらしい。^{注38}先ほど述べたように配石遺構の構築が、中期末～後期初頭を中心に活発になった点が指摘できる。しかしこのようなどちらかといえば小規模と考えられる配石遺跡はともかく、樺山・宮沢原のような一定の場を持ち、“群”形成まで至った遺跡は非常に稀であると思われ、そこには今まで述べた、配石遺構“遺跡”の過少性も指摘できそうである。

これに関連して、以前宮沢原を分析した際、宮沢原C・D遺跡と同時期の周辺遺跡を比較したことがある。^{注39}北上川中流域では中期後葉に長期間に及ぶ遺跡の廃絶を補うように、継続期間の短い小規模な遺跡がさまざまな地形単位に拡散して分布していたが、次の後期初頭、堀ノ内併行期を中心とした時期には前代の影響を引き継ぐものの、漠然とながら低地を中心に分布する傾向が認められた。ところが宮沢原周辺にはこのような傾向はなく、地点を変えながらも台地上に後期初頭まで連続して遺跡が形成される。従って、中流域では非常に特異な遺跡であることを指摘しておいた。この時期、これ以外の遺跡では規模から考えても配石遺構は群形成まで達しなかったと思われ、このように中期後葉に遺跡が廃絶されず後期初頭まで継続し、しかも縁辺部とはいえ台地上に立地する“例外的な”遺跡のみに配石遺構群が見られる点が注目された。

残念ながら筆者には宮沢原周辺以外、このような遺跡の動向は分からない。ただしこの点に関して立石・観音堂周辺の遺跡の分布状況が参考となる。第7図を概観して第一に気づく点は両遺跡周辺とも、宮沢原周辺の遺跡とかなり近い関係をもつ点である。すなわち両遺跡とも遺跡が集中し、中期後葉に遺跡の廃絶は認められず、地点を変えながらも後期初頭に至るまで間断なく遺跡の形成が認められる。どうやら北上川中流域で指摘したような中期後葉の遺跡の廃絶、小規模遺跡の拡散分布という図式は両遺跡周辺には見られそうにない。内ノ沢遺跡周辺はあまり明らかでないものの、

縄文中期末～後期初頭の配石遺構“遺跡”の成立について

この視点で考えると樺山遺跡もこの関連でとらえられると思われる。筆者が指摘した中期末～後期初頭の遺跡の拡散化という図式に当てはまらない遺跡のみに、このような配石遺構群が発達したと考えられるのである。

宮沢原周辺以外、中期末～後期初頭の遺跡群の動向は不明であり、従ってはや筆者の想像にすぎないが、この時期の遺跡の小規模拡散を前提とした場合にこそ、逆にこのような遺跡の過少性も説明できるのではないだろうか。さらにいえば、これらの配石遺構群の発達、これらの遺跡を営んだ集団と密接に関連をもつものと考えられ、それを支えた集団がある程度の期間、そして労力とが必要と考えられ、その点でも今まで述べた“遺跡”以外がその要件を満たしていたとは考えられず、すなわち群形成まで至らなかったと思われるのである。

配石遺構群の形成が土器型式的に見れば何段階かの隔りがあるものの、ほぼ中期末～後期初頭を中心に構築されたものであり、さらにこの期を境に長期間に及んだ遺跡そのものが消滅する点は、今まで見てきた遺跡群のこのような動きと何らかの関連があることが想像される。周知のように中期から後期にかけては台地から低地へと立地上の大転換が見られたが、この時期にこのような遺構群が形成された点は遺跡群の変遷と言う観点からも、非常に意義深いものがあると思われる。これらの配石遺構群を営んだ集団の、その後の動向は分からないが、上述したように低地を中心に遺跡が分布することから、これらの集団も低地を中心に展開したことが十分予想される。事実、いくつかの“遺跡”には、配石遺構群周辺の低地上に後期遺跡を伴っている。

この点に関連し、すでに触れておいたように配石遺構群の立地上の問題がある。配石遺構群の形成は以上述べた“遺跡”、さらにはそれ以外の遺跡でも台地縁辺部もしくはそれに近い地形上から確認される場合が多い点は以上述べた通りである。従来この種の遺構は墓壇説と祭祀遺構説に分けられ、^{注40}祭祀遺構説では“見晴らしのよい台地上”から確認されることから、山岳信仰に結びつけられて論じられることが多かったようである。江坂氏もこの説を踏襲したが、樺山遺跡では周囲にこのような山々がないことから若干の疑問も提出されていた。しかし今まで述べてきたように、配石遺構群の形成は以前の遺跡が台地内奥部から縁辺部へ向けて進出する過程に構築されたものであり、また低地を見下ろす位置に立地する点は、この種の遺構が何等かのレベルで低地をもしくは低地上に存した何かを意識して形成されたことも想像されるのである。それが集落址など単一的な目的であるのか、あるいはさまざまな目的が複合的に組み合っていたものなのかは不明とするほかないが、この点でこれらの配石遺構群が台地縁辺部に立地しなければならない理由もまた存在すると思われるのである。かつて宮沢原で分析したように、台地と低地とを取り結ぶいわば“結節点”ともいべき位置にこれらの遺構群が発達する点は、これらの構築に際して何らかの規制があったことを暗示させないであろうか。

従来このような配石遺構“遺跡”はその地域を代表とする基幹集落などとされ、配石遺構群もその地域全体の共同祭祀的な役割を担う遺構として位置づけられてきた。^{注41}しかし、いままで述べてきたように配石遺構群の立地、さらには立地をも含めた遺跡群の変遷という観点からみた場合には、

また別の観点も開けてくるように思われるのである。

おわりに

筆者は中期遺跡と後期遺跡の立地上の転換、すなわち拡散化を経た後期遺跡の低地進出の傾向を指摘している。ところがこのような傾向に当てはまらない遺跡も数多く存在する。いままで述べてきた配石遺構遺跡もその一つである。配石遺構遺跡は後期初頭、場合によっては中葉まで造られ、それを契機に姿を消してしまうことはすでに指摘した通りである。

しかし配石遺構群が単純に存したわけではなく、配石遺構群の後背地というべき所にそれ以前の遺跡が存在し、土器細別上の空白の問題もあるにしろ、何らかの関連を持ちつつ成立したことは十分推察できる。そして配石遺構群が台地縁辺部、もしくはその付近から確認される点は重要であるように思われた。この地点は台地と低地を結ぶ中間点に位置するからである。これらの要素は配石遺構群の形成が後期遺跡の低地進出の傾向と無関係でなく、いままで述べてきたように時期的にややバラツキはあるものの、一致した現象として見なせるのである。このことは逆に配石遺構遺跡の成立に関しても何らかの示唆を与えてくれるものと思われた。

ただしこれらの点は、いまのところ北上川中流域の配石遺構“遺跡”として確認される配石遺構が群となって確認される遺跡のみを対象としたものである。“はじめに”でも指摘したように地域を異にした場合にはさまざまな形態の配石遺構が存在しており、中流域周辺でも配石遺構が一基もしくは数基しか確認されない遺跡も分布している。これらの遺跡は台地縁辺部の立地という傾向はほぼ指摘できそうであるが、その他の様相は明らかでない。また同じ時期の遺跡に配石遺構をもたない遺跡も存在するのであり、これらの遺跡の違いは中期末～後期初頭の遺跡形成を考える上で極めて重要な問題をなげかけている。この点については若干触れたつもりであるが、細かな動態については不明であり後に範囲を広げ詳述する予定である。

また今回の論考では中期末～後期初頭の配石遺構を中心に扱ったが、もちろん配石遺構はそれ以前から存在するのであり、これらの遺構と何らかの脈絡を持ちながら後期初頭に向けて発達したことは想像に難くない。ただし北上川中流域に限っていえば以前の配石遺構は明らかでなく、いまのところ不明としておくほかはない。あるいは他地域からの影響も考えられる。この点も今後の課題の一つである。

以上今回も冗長にすぎた論考になってしまったが、本文を作製するにあたり上野佳也・藤本強両教授、今村啓爾助手、柳沢清一氏、また大塚達朗助手をはじめとする遺跡調査室のみなさまから有益な御助言を得ている点を記しておきたい。さらに、資料そして資料に関する御助言を次の方々から受けている。宮沢原C・D遺跡伊藤陽夫氏、観音堂・立石遺跡大迫町教育委員会中村良幸氏、樺山遺跡北上市教育委員会稲野裕介氏、内ノ沢遺跡和賀町教育委員会浅田知世氏である。なお事実記載上の誤りがあれば全て筆者の責任である。文末ではあるが、以上の方々に謝意を表して結びとしたい。

注および引用文献

- 1) 上野佳也 「配石遺構についての一考察」『東京大学考古学研究室紀要』3 (1984)
- 2) しかし秋田県の黒川B遺跡では過去、大湯遺跡に類似した環状列石の存在が予想されたことがあった。
秋元信夫 「秘田県の配石遺構」『よねしろ考古』2 (1986)
児玉 準 『黒川B遺跡の第一次発掘調査報告書』(1985)
- 3) 葛西 励 「青森県における縄文時代の組石棺墓」『北奥古代文化』17 (1986) 他
- 4) 佐々木彰 「岩手県宮沢原C遺跡の復元」『古代』84 (1987)
- 5) しかしこの現象は北上川流域に限ったものではなく、中期末～後期初頭ではある程度普遍性をもった現象であるらしい。ただし山本氏が指摘する関東・中部地方の配石遺構と北上川流域のそれとでは遺構の種類・遺構群の分布の在り方に大きな隔たりが存在する。
山本暉久 「縄文時代中期後半期における屋外祭祀の展開」『信濃』33—4 (1981)
- 6) 阿部義平 「配石墓の成立」『考古学雑誌』54—1 (1968)
山崎 丈 「縄文時代配石遺構研究概史(1)」『New Wave Archaeology』Vol.2 (1976)
山崎 丈 「縄文時代配石遺構研究概史(2)」『New Wave Archaeology』Vol.3 (1978)
- 7) 北上川中流域で門前式土器はいくつかの表採資料を除くと、きわめて限られた遺跡からしか出土していない。立石・観音堂・樺山・八天、そして筆者が今後発表するつもりでいる宮沢原C遺跡などが代表的遺跡である。しかも八天以外、全て配石遺構“遺跡”として位置づけられる遺跡である。この点はこの時期の遺跡の動向を考えるうえで、きわめて示唆的である。
熊谷正也 「門前式の検討」『岩手県立博物館研究報告』4 (1986)
- 8) 江坂輝弥他 「江刺郡稲瀬町樺山遺跡調査予報」—第一次他、二・三次—『北上市史』第一巻所収(1968)
北上市教育委員会 『北上市稲瀬町樺山遺跡調査報告』(1968)
この報告で第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳとした地点は発掘箇所の大体の場所を示したものであり、地形・遺物等の分布から全て同一遺跡として把握される。なお、配石遺構地帯は第Ⅴ地点、後期初頭の遺物分布地点は第Ⅵ・Ⅶ地点とされる。
北上市教育委員会 「樺山遺跡調査概報」(1977)
- 9) 注6と同じ。阿部論文。
- 10) 中村良幸 「岩手県内の配石遺構」『北奥古代文化』17 (1986)
- 11) 胆沢町史刊行会 『胆沢町史』1 (1981)
- 12) 草間俊一・伊藤鉄夫 『宮沢原大清水上遺跡』胆沢町教育委員会 (1963)
- 13) 草間俊一 『宮沢原立石遺構』胆沢町教育委員会 (1967)
- 14) 配石下に立石をもつという点のみを取り上げれば、秋田県玉内遺跡に類例がある。ただし晩期の配石墓である。秋田県埋蔵文化財センター 『玉内遺跡発掘調査報告書』(1988)
- 15) 注12と同じ。また伊藤鉄夫 『萱刈窪遺跡調査報告書』胆沢町教育委員会 (1973)
伊藤鉄夫 『宮沢原E東・赤剥遺跡調査報告書』胆沢町教育委員会 (1973)
- 16) 野口義麿 「5 信仰」『日本の考古学』(1965)
- 17) 中村良幸 『立石遺跡』大迫町教育委員会 (1979)
中村良幸 『観音堂遺跡』—第1次～6次発掘調査報告書— 大迫町教育委員会 (1989)
- 18) 草間俊一他『天神カ丘遺跡』大迫町教育委員会 (1974)
- 19) 中村良幸 『稗貫川流域遺跡詳細分布調査報告書 I』大迫町教育委員会 (1987)
- 20) 19)と同じ
『観音堂遺跡』と同じ。それ以外に、21)で示した年次毎の概報もある。
- 21) 中村良幸 『観音堂遺跡第1, 2, 3, 4, 5, 6次発掘調査概報』大迫町教育委員会 (1979, 1980, 1981,

1982, 1983, 1984)

- 22) 駒井和愛 「岩手県沢内村のストーンサークル」『考古学雑誌』47—2 (1961)
- 23) 注6と同じ。阿部論文。
- 24) 遺跡は内ノ沢川と水上沢が合流する小台地上に形成されており、これらの沢に挟まれた中央が最も標高が高く、合流する地点に向けて緩やかな傾斜を示す。遺跡は標高の最も高い地点から内ノ沢川に面した緩斜面上に発達していたと考えられる。配石遺構群は斜面の最末端から確認されている。なお、これらの遺跡は1960年前後の開田の際に配石遺構群のみを残して、ほとんど壊滅しているが、周辺からは現在でも遺物を表採することができる。この遺跡に関しては土地所有者の高橋八重三氏より話を伺っている。氏に謝意を表したい。
- 25) 北海道ではこのタイプの配石遺構は余市町西崎山から発見されている。この遺跡は過去駒井氏らによって何度か調査が行われ、大湯の日時計型の配石遺構と類似した遺構が確認されている。
駒井和愛 「我が国における巨石記念物(続)」『考古学雑誌』37—1 (1951)
駒井和愛 「日本に於ける巨石記念物(続々)」『考古学雑誌』38—1 (1952) 他
- 26) 高山 純 『曾屋吹上』—配石遺構発掘調査報告書—(図版篇) (1965)
- 27) 例えば、次の文献がある。
大場磐雄 『上原』長野県教育委員会 (1957)
斎藤 忠 「配石遺構とは何か、何のためにつくられたのか」『日本考古学の視点』上 (1974)
- 28) 藤本英夫他『小坂環状列石墳墓』小坂町教育委員会 (1969)
この時期まだ“配石遺構”という用語が定着せず、この種の遺構全てを環状列石あるいはストーンサークルなどと呼び表している。従って小坂の場合も環状列石となっているが、個々の配石遺構をさしてこのような用語を用いたものであろう。宮沢原D遺跡の場合も同様であり、それぞれの配石遺構に対してストーンサークルの用語を用いている。
- 29) 岩手県教育委員会 「下村B遺跡」『上村遺跡・下村A遺跡・下村B遺跡』(1983)
- 30) 草間俊一 『岩手県福岡町堀野遺跡』福岡町教育委員会 (1965)
- 31) 滝沢村教育委員会 『湯舟沢遺跡』(1986) この地域からは他にも、けやきの平団地遺跡からこの時期の配石遺構が確認されているが、報告書が未刊であるため不明である。
- 32) 成田滋彦 「青森県の土器」『縄文文化の研究』4 (1981) 他
- 33) 注22と同じ。駒井氏は配石遺構をエミシ・エゾの墳墓と考えており、地域的な分布を問題とし、時期的な変遷などについてはあまり言及していない。
- 34) 注19と同じ。
- 35) この点は水野氏が大湯遺跡で環状列石とそれを取り巻く集落を想定しているが、それとは異なる観点である。
水野正好 「環状組石墓群の意味するもの」『信濃』20—4 (1968)
- 36) 4)の論考では宮沢原C・D遺跡と関連する遺跡として、東方約2kmの宮沢原より一段低い低位段丘上に立地する赤剥遺跡を想定している。ただし、やや配石遺構群から離れており疑問も残る。筆者は遺物を検討したことはなく、従って従来の論考では扱っていないが、『町史』にはC遺跡直下にいくつかの後期遺跡の存在が指摘されている。愛后森下・愛后中・成沢北・赤剥西などである。愛后中・成沢北は後期前半に位置づけられ、またいずれも小規模遺跡らしいが、残念ながら詳細は不明である。
- 37) 北上市教育委員会 『横穴遺跡発掘調査概報』(1980)
また大迫町でも中村氏の指摘によると小屋場遺跡から単独で配石遺構が確認されている。
- 38) 北上市教育委員会 『八天遺跡』(1979)
樺山とは形態も異なるいくつかの配石遺構が確認されているが、群形成まで至っていないようである。
- 39) 注4)と同じ。
- 40) 周知のように墓墳説は斎藤忠氏を、祭祀遺構説は江坂氏を代表とするが、この間の問題を阿部氏が手際

縄文中期末～後期初頭の配石遺構“遺跡”の成立について

よくまとめられている。

斎藤 忠 「配石遺構—特に環状列石について—」『考古学ジャーナル』254 (1985)

江坂輝弥 「配石遺構とは」『考古学ジャーナル』254 (1985)

阿部義平 「“日時計”の考察—大湯環状列石の配石類型の意味」『よねしろ考古』2 (1986)

41) 注5)と同じ。山本論文

参 考 文 献

阿部義平 「配石」『縄文文化の研究』9 (1983)

秋元信夫 「秋田県の配石遺構」『よねしろ考古』2 (1986)

林 謙作 「縄文期の村落をどうとらえるか」『考古学研究』26—3 (1979)

吉岡恭平 「宮城県内の配石遺構」『北奥古代文化』17 (1986)

矢吹俊男 「北海道の配石遺構」『北奥古代文化』17 (1986)

杉山博久 「縄文時代の配石遺構」『考古学ジャーナル』134 (1976)

The Formation of Sites with Stone Clusters from the
end of the Middle to the Beginning of the Late
Jomon: the Kitakami Basin, Tohoku.

Akira SASAKI

Many Jomon sites with stone clusters of various dates and styles have been found in the Tohoku region. Construction of these features flourished from the end of the Middle to the beginning of the Late Jomon. Sites with groups of stone clusters appeared at this stage, although such sites are not numerous.

In the Kitakami Basin, which was the focus of my study, there are several sites with stone clusters from the above-mentioned period (Fig. 1). Some common factors can be recognized among these sites. Let us compare the Kabayama (Figs. 2 & 3) and Miyazawahara (Figs. 5 & 6) sites first. To begin with there are common styles of stone clusters such as rubble arranged in a circle around a standing stone. Secondly, both sites are located on the edge of river terraces. Thirdly, both sites decline and disappear soon after the construction of the stone features. We can also recognize some similarities in the history of these sites before the stone clusters. Miyazawahara dates from the beginning of the Early Jomon whereas Kabayama was not occupied until the end of that period. At both sites, however, the living area was situated behind the area with the later stone features. This is also true for the Kannondo and Tateishi sites which lie further north (Figs. 7, 8 & 9). Here the living areas are similarly located behind the stone clusters which are situated at the edge of river terraces. The Sawauchi site appears to possess the same features.

It is well known that site locations underwent a great change between the Middle and Late Jomon. Generally sites moved from high river terraces to lower ones. This kind of change, however, cannot have been uniform. As I have pointed out in earlier papers, during the periods of stone cluster construction at Miyazawahara, single-component small-scale sites were scattered across various surrounding landforms. Settlement patterns changed after this 'fissioning' phase. This phenomenon whereby many sites transferred to lower locations at the beginning of the Late Jomon is not confined to Tohoku, but can also be recognized in the Kanto and Chubu districts. This shift hints at an extensive change in food procurement systems.

It is important to note that sites with stone clusters continued to be located on high

river terraces notwithstanding the above-mentioned general tendency. This fact cannot be understood without recognizing that sites with groups of stone features are of a special type and that not all sites possess this type of structural remain.

Various factors must have been behind the development of sites with stone clusters. One of these factors is seen in the fact that these sites did not disappear at the end of the Middle Jomon, but continued to be built on high river terraces through the beginning of the Late phase. This suggests the existence of groups of people strongly attached to these sites or to the activities that took place around them. The other fact worth emphasizing is that stone clusters were situated at the edge of high terraces, a location midway between the former living areas and the new centres of productive activity on the lower terraces.